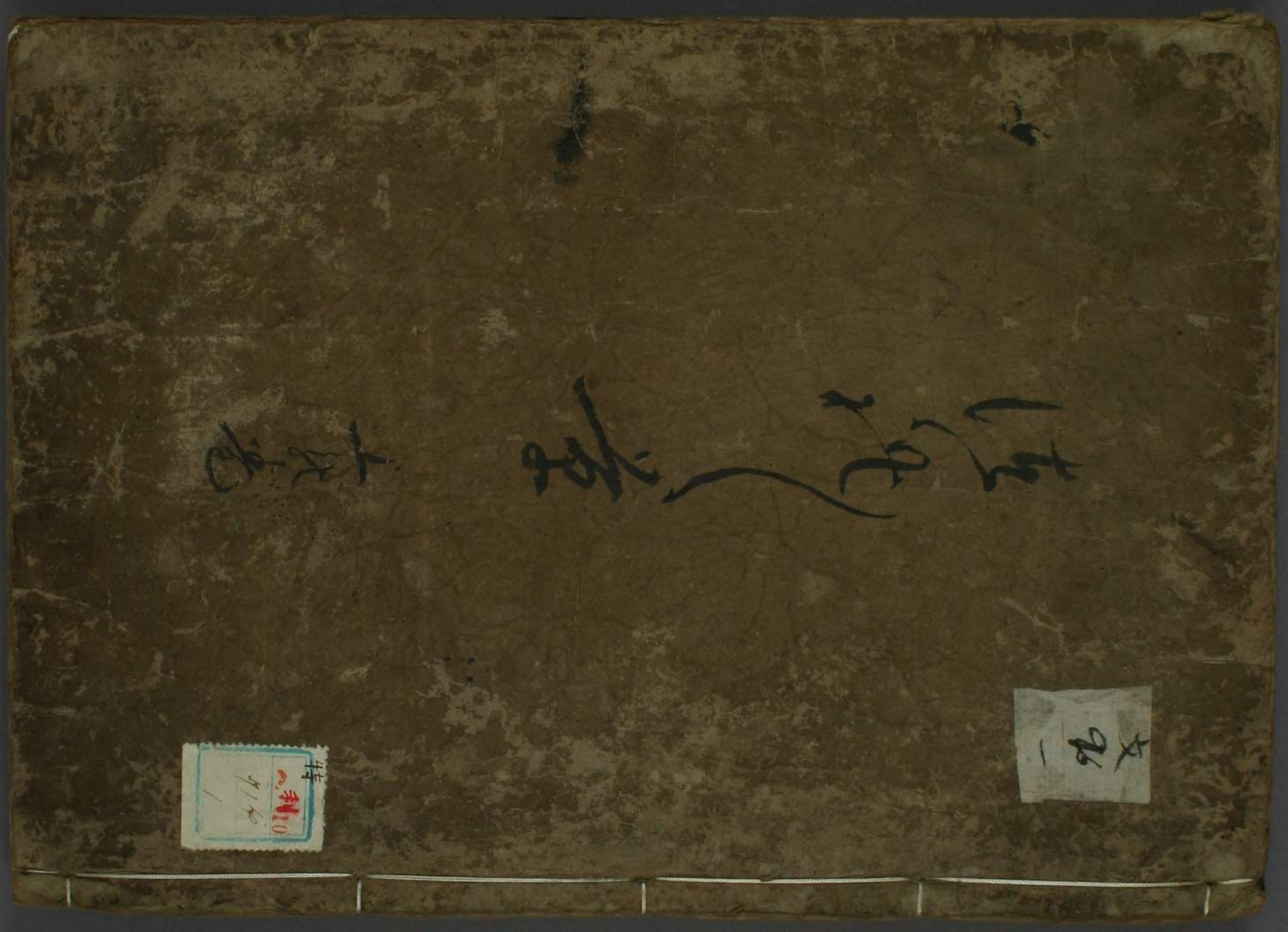


帝国図書館蔵

帝国図書館
門
號 ウ14
巻 1

つきてくま　徒然とくさむ
仮くまハもしひまかうちまき
のたくひく
日くしと　ひくしと山海乃まはよ
問答　高倉殿根の君ゝ宵くろ
よりてもむろひ　何とまく双ゝむよ
とまゝ人ゝよへきゝひなしゝれく
かようろりゆく　心八徒のかく弟埜
くろ事と云ゆ況あり
うゝふゝと　由来なきゝ
みくくゝ　そゝさまくゝそゝ
助沈之
非ゝ月乃せゝ乃ちろときゝ
うくくゝうくくゝくれそゝふゝき
もろくふたゝくれ　謙退辞也
こんまてうけさゝゝ乃序

明治二十二年十一月五日
平田延成氏寄贈

なり
いざや 鈔談乃ことまでに
ゆゑもかくて悉くうけ申
といふ心なり 可畏とかきて
かしこしとよめり
竹乃園生これを云葉まて 竹園
とハ親王の御事 竹孫これを
云ふとてといふ也
人間乃種子なりける
此花是非人間種再養平臺
一片霞此花是非人間種蘡
樹枝頭第二花ニ而親王の事之
やんことなき かくらう云也之
無止とよめり
一乃人 摂政関白をいふ
職原鈔曰執柄必蒙一座之

へきことこそおほかめれ。
みかとの御くらゐハいとも
かしこし竹のそのふ乃
すゑ葉まて人間乃
ねならぬそやんことなき。
一乃人の御ありさまハ
さらなりたゞ人もと
ねりなとたまハるきハ

宣旨故ニ稱ス一ノ人ト
さなり 拾芥の彼之
たゞ人 摂家の外ハ皆たゞ人なり
されとも王孫まてハ其中なる
舎人とハあつ時ハ羽林家の中
少将をさして可なるか
なりなと 随身を清の舎人ハ随身
世是を衛府乃随身といふなれゆへ
これを舎人とてつかひなり 小
随身ハ家々にあり
はふれ はふれたる義之
なかハそてつゝむとたちむかふことし
つねまゐいてなとしあるなく
なまめかし やさしきなり
秋乃野になまめきたてる女郎花
あなかしかましはなも一とき

ゆゝしと見ゆその子むまこ
まてハはふれにたれとなほなまめ
かしそれよりしもつかたハほとに
つけつゝ時にあひしたりかほなるもみつ
からハいみしとおもふらめと
いと口をし法師はかりうらやま
しからぬものハあらし人にハ木の
はしのやうにおもはるゝよと清少納言か

それよりもてこは文住院社
上人多代まろたひあるへ
ぬか殉死　肥後守清正元寇の
むきめ一除院の主居まつへ
—女房あり
いきりひまくこのこ—と
りうハ猛の字ハ勢ハ
也附ありていいあり心あ
し
博変ゆ—と　平安城人謙議
大夫橘恒平之子也和州多
武峯の僧と撰集抄に詳也
又元亨釋書に傳あり
えこあり えこすこの伎之一向
と事也
みりけたのむのりもひこりよ

かきろり寒さろとろうしいき
ていこ—とふこ—す潜変ゆ—と
仏の法教ふたうみんとう笑ゆ
えこあるの世捨人中くあ海
りけこ—ありあんへいこ—ち
ありさりのすくれこんこあ

ちゆかこ—ろろ—ろ—とみくかろ
あいきろう　教と事也
海りうへ人々れ把ちいひこ—ろ
きこうくこ—ろ。あいぶこやこ—ありて
云意おかこ—ぬこ—ろあみむこ—ろい
海りけれ—てこ—と—ろ—ろ心
とりせこ—ろ。中性人てんこ—ろに
行こ—ろへ人々れ—ぬれこ—ち—ろ生れ
つきたこ—あ心分こ—ろ賢こ—ろ哭
こもこ—ろ—ろ—ろ—ろんこ—ち—ろ

めてこ—と—ろ—ろ人乃　かめこ—ろ云
家也そ心要こ—ろ厳の人をいよ
な性　生れつきの天性こ
ぬれこ—ち—ろ—ろ—ぬれつきこ—ろめ
ぬれとかこ—ち—ろとかとと評論
—たろこ所詮心こ帰きろ伝
こ三界唯一心ゆめ文まお叶う
かこ—ろきこ—ろり　賢紅揚色こ
—人こ—ろれこ—ろ—ろまめこ—ろ心こ

さえ文　さえ戈也

まろくこり　日本記大夫以上
　名有差降
うけす　度量ゑ〜ぬ之
文のる　漢書字向のるあり
宵識　をれとろ事あり〜ゝ
云事　おやきと〜ゝめり禁
中のまろとゝあり

人乃後　唐書魏徵薨太宗臨
朝難曰以銅為鑑可正衣冠
以古為鑑可知興替以人為
鑑可明得失朕常保此三鑑
内防己過今魏徵逝一鑑亡
矣

くゝとろさ　真八衣冠〜ゝしき祈
行八あり〜祈まハ人ゝ〜ゝ祈〜

心さ海の紀人ゆさえゑく成れ
ぬゑてゝりたにくさけゑろ人
ゆ之海ゆとそけすきとろく
ゝれゑ紀ゝるれあるゝゝさ
ゆハ海とゝきえの道作文和ゑ
管絃のるえ宵識ゑ云事れゝく
人の後ゑんゝいゝうへくれ。
よゑとゝゑゝすけゆとゝき。

ゝゝおゝくて掬ゝとりゝゝ海
ゝうゝろゝれゝけこゑゝぬ
ゝうおのこハよゝくれ
ゝゝてハ堯舜文武日本ゆ
て古の聖代の政ゆゝ民
きゝ　延喜天暦の帝をゆ人
きゝゝ　法乃字ゝ花蘇な子
ゑ之
ところせき　所狹とゝくゑ
ゝゝろ祈之
ゑりゆとゝろゑく　かりひつきゑ
きんゑくかゝねゑ之
衣冠ゝり　毛ゝり九條袈裟也

より馬車にいたるまてあるにし
たがひて用ゐよ美麗をもとむる
事なかれとぞ九条殿の遺誡にも
侍る順徳院の禁中の事どもを
かゝせ給へるにもおほやけの奉り
物はおろそかなるをもてよし
とすとこそ侍れ

九条殿　右丞相師輔公の作
一巻あり
順徳院　人皇八十四代後鳥
羽院第三皇子禁秘抄一巻
あり禁中の作法ともみつ
く
おほやけのたてまつり物　みかどの召物
くろきものゝ公の字をおほやけを
とよめり又天子とも云とぞ
おほやけとこそよめり

三

万にいみしくとも色このまさらん
男はいとさう〻しく玉の巵の底
なき心ちぞすべき。露霜にしほ
たれて所さだめずまどひありき。
親のいさめ世のそしりをつゝむに
心のいとまなくあふさきるさに
思ひみだれ。さるは独ねがちにまど
ろむ夜なきこそおかしけれさり
とてひたすらたはれたるかた

さう〻しく　寂寞とかきりさ
ひしきさく〻まてハこと
〻ぬるかなへし
むかしのさかづきのそこなき　玉巵
無當桂華無實　當ハ底也
うなきさかつき　往ニ海來ニ海之こ
みさかつきはなのひたくなる
也　八雲抄にもするもかくす
みもとあり
しかれとてとすれハうかくすれ
あふいひかはすあふさきるさま
たりしかれ　やさしきこゝろわめ
うる詞也
ひたすら　ひとへ也
たはれ　風流とも狂ともかけ
り

たゝれをとゝ人ハ人くとも海とちゝ
ゝんそくせりおそ[illegible]たゝれ殘
抜ゝ是ハ聖〻よゝこハ為〻女房也
いつれの人ゝつゝとゝろへ殘

後の世代事 此度ハ諸傍あり添
氏ハ[illegible]ゝ大將あくおりひ食
節の三位ハ世ゝのあくまゝり
きゝをいひつゝこのたんより
後世よゝろ事ハあくをつゝ

不幸 [illegible]ゝいあく時ハあゝ人ゝ
あゝ
ふつゝゝ [illegible]ゝき義く

まゝりのもあく せゝもとゝ
ゝゝあきゝ外をねゝふゝの
ちつゝゝあり
さゝかゝまあゝまゝり やゝゝれ
くゝゝよあゝまゝりきゝ

顯基中納云 西[illegible]大臣
明石の孫大納云後賢卿の
一男也
配所 流罪を遷の人ハあゝ
ゝゝ也
前中書王 中務兼明親王延
喜の皇子也 侍文能書の人
也
九條右政大臣 伊通ス也
花園右大臣 有仁ス也後三
条院孫補仁親王ハ[illegible]ゝ也

ゝゝさゝてゝて行ゝゝもあゝ[illegible]
言ゝゝゝゝゝゝかゝてゝあゝ[illegible]
顯基の中納言のいひゝん配所
ハ月つゝあゝそゝんゝゝゝ
えねゝゝ
我分乃やんゝとあゝゝんゝ
ゝゝて教あゝゝゝんゝゝ
ゝとゝふゝゝあゝゝあゝ

そう　曾の字く子孫と子曾、
重也　自曾祖至無窮皆得稱
曾孫ト
深殿の在く　大政大臣良房
溢ハ忠仁公深殿のきさきの
父清和天皇の外祖父也
世継の翁代物語　一ハ大鏡とも
つく者ハ為業清右家作
也文德天皇より後一条院
まで十二代百七十八年帝王
大臣ハの事をしるせり
聖德太子　用明天皇第子也
平氏聖德太子傳曰太子
三回御陵勅墓エ曰汝斷四
路朕意趣有二一者為金無
大行道之煩二者我子孫為

金無日ハ本之相續又曰子孫
不續豈云大啓孔子遺教無
後嗣者為一不孝矣吾為釋迦
大聖弟子豈為孔子小賢翁
字云云

あくしゅ　あくしゅとは悪
あく心をいふなり
これとてもとまるへきにハあらし
まのこしとよもしろもく露
あくしゅくさきのまこすは秋風
こそうく露や玉川ゆこそ
ふるき名所ハ阿太志野大和
或ハ山城ハありと後撰玉川
みよしの会せり玉川又伊勢の
しもあくしゅ清浦名所なるのせ
いろとハ名所ハふる宿と詠り

墓ハそのつゆ結ぶ時も。
こゝをきれいこゝ様たて。
子孫あくしゅとやふあり
ゆくろとやや
つゆ野の露きゆる時ハ
紀山の煙こもりてのこ住つ
あくしゅ　ぷ　ぷ　ぷ　ぷ
世い定めあさこ　ふ　こ　れ　命

あるを合れ判四季あるを乃
ふたてらぬまや知人の又化
型をとりそりれ暫れ多合にそ
野をすくさてあくれまて彷
きんもあちきの

[illegible]山 あくさう業よきのす
うをとりへのといふ
ありひとひかあるともとりへやか
つくくと一年ばくすれくるよ
こよあらはもやあるすれく
とやくくよ年をとしたもも一夜の
業はちくせあ俗そぬせよ
見るくきあ俗ばそ俗はは

秋死不見四時之全
こよあり 八去よ年かあるとと
あり河海よ無越因推とも書
もかをうもあよといふ之
いろちあるをれは 荘子多男子
則多懼富則多事壽則多辱
是三者非所以養德也
夕のはよ子孫をもして
朝露貪名利夕陽愛子孫
さうり さくへめもふと
いまもあれるひとはれとも山
さうゆくときもありくくものと
せをひさあるかのまあく
論語及其老也血氣既衰戒之在得 又云老而不死是
為賊

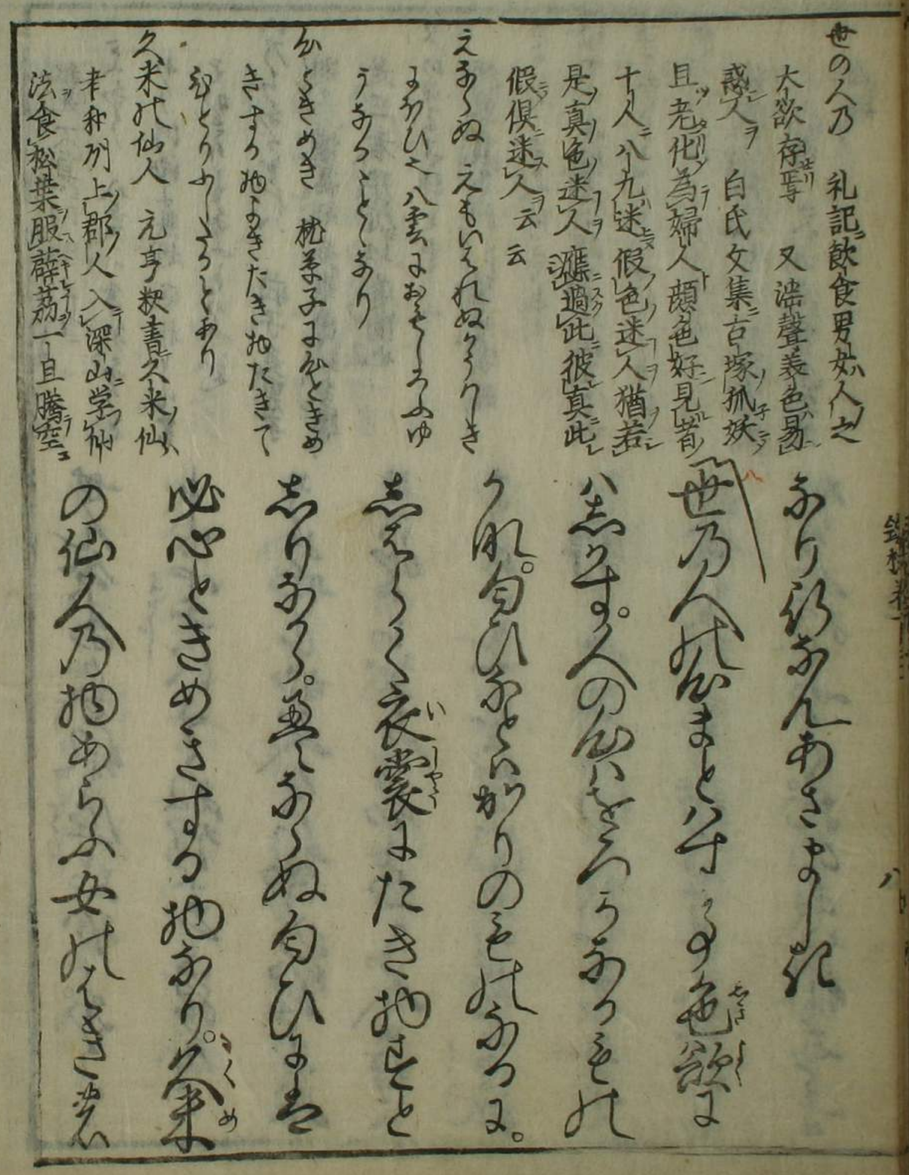
せん命あるを恢厚おかれおくく
ともはせ十にぐるねれまてをんて
うめやとかるへくれのれとあぬ
きいかくらをそうんもあくへよいて
まらんまをかりの夕のはよ子孫
とをもしてぐろひをとをんまて
の命をはるまりぐすくせをむき
かるんれまくぐものあいれとるを

世の人乃　礼記飲食男女人之
大欲存焉　又淫聲美色易
惑人　白氏文集古塚狐妖
且老化為婦人顔色好見者
十人八九迷　假色迷人猶若
是真色迷人　樵過此彼真此
假俱迷人云云

えもいはれぬかうばしき
ゆかしさ　八雲よおもしろみゆ
うあるこゝろあり

かくきめき　枕草子よかときめ
きすゝろぬるきたきぬたきて
ゆとりかゝるこゝろとあり

久米仙人　元亨釈書久米仙
孝和別上郡人入深山学仙
法食松葉服薜荔一旦騰空



あり行あんあさゆれ
世乃人ぬまと分ゝ
ゆ色欲よ
ふうず人の仙さんうあるそれ
うれ白ひかりのそれあるよ。
ゝゝゝ衣裳よたきぬとと
ゆりあゝ。あてあるぬ白ひまを
必心ときめさすうぬあり。米
の仙人乃ぬあらふ女ぬてきさい

飛過故里有婦人以足踏洗
衣其脛甚白急生深心即昵
隆碧　婦曰昔嬉女授言曰我
不跨一角仙頭不出山果然
久米見白脛而墜有以矣哉
於戲色之毀人也可不慎乎
かの久　かりつくろひくさ
まくらのうるあるねさめ
あんゝ

女ハくしけ　文選衛右典於鬢
髮飛燕電於躰輕　詩君子
偕老副笄鬒髮如雲不屑髢也

女ハ髪ぬてきうんこうの同
うあれぬの初ぬくあとハそれ
いひうきうひよう抜こすも

けうひ　氣ぬまをこあり又
形勢とも是氣ともきゝ

うちあり　常住不の義あり
たくあるさ海あり
いもねすねるねすあり
天こあるあるこれらの色はなを
かとけくろいうよねくをす

あゆくもあるねるきまも
坐臥すくもあるねるきまも
らくくんするはたくいろを
ふるゆくあり
ぶんぶんぶんぶんぶんぶん　恩愛執著之
六塵　眼耳鼻舌身意を六根
と色聲香味觸法を六塵
とをいふ
楽欲　げうよくとよむべし
ねがひもとむること

ものらるれどもまれてうちあるさ海
ものくのんなまとりーどこて女
のうちとひろいもねずあ弘
れーとも出ひこらだ色へく
もあるぬるきまもくだへ五つふ
だて多とふるゆくあり。深ま
色恋の乃を根ふく深とを。
六塵の楽欲あり　といへとも

欲魔　いとひてあるく
しとあり
うのまこひ　色欲をいふ
いうそうそれ山海のもけくれ
入といりねるくまもふん
女のうこまもち　女のうこまて
大船をつくとこ三界苦悩経
よありとあん
女のうこげうあった　美女あるい
名あるく超女のあったまて他ぬ
まいあるまりも多く庶のよ
ふまあ必定ありとあるくへき

みふ欲魔ちつへーをまたて
うれりとひの乃をうあかくきのこ
う色てうもわうきん智あるもまろ
ふるもぷうーあーとんゆうさ
れて女の髪をちをまれる縛まい
大家もまくつふうれ女のうきろ
あーさまて他きろ第まい秋の庶
必まうとこいひつくへたうこ内

朱文公自警編　詩十年　淳熙二丁

身輕帰對梨渦却有情世上
無如人欲險幾人到此誤平生

つきづきしく　さもありぬべき
義之世語つきづきしきとよへ
たるひと
うりけるとり　逆旅　寄寓
おもあれよりきん乃はやふ位あるくろ西ばさ〜へ
くろ月は多も一きこハきこくとんゆうかーぺいま
めーくきらくうあるねとぞ　ちはかりて　ぞき
いまめーくきらくあるねと
とあるねをけ　まものあるさ海
うりくきろきこくろよ

ハあるねともと云すえ
ヨさとあるぬ　うりつくろあ
そのまくの汗へ
ちいくい　すいくさえ　透垣とか
く
洞家　よろつの道具をよへ
おりくのたくさけをつくー
いろと花瓶よ他ふとよ
くのやまこの　かくはは日中地表
いろくの器をつへ

賢子
よすめてすぐいのたりおうー
くうちあろ洞家も前ありて
やとろうあうくうかよくとんも
れありくけくくけをつくー
こうきたくかくけやまくけめら
ーくえあるぬ洞家ともなる
へとき。前載乃ままてかの
まくあるすつくりあせふハん

さてもやハらかくすひへきみ時の
まれなりとも有りとの
すこしとあつーとろまあ
ありといふるへ
大くらゐ面ぬよーくこと面をー
ろくくもれ　こんくくもむまひ
てあもをおこすれくこえん
後徳大寺　実定ゑ井蛙抄曰
徳大寺の間といふところ
あり寝殿の西北角のろ
こまて西行ゑ對面せこれ
きろとも
西行　俗名佐藤兵衛尉憲清秀
郷九代嫡孫鳥羽院御面也

ふめもくるーくいとこひ。さて
もやハらかくすひへきみ時乃
よけくなりとも成あんとうちろ
うりいろ。ぺくるハ家兵にこう
ーとさ面ハをーちくるれ。はぬ徳大寺
のたにれ寝殿ゑ鶏ねきーとて
かいをちくれうきるを西行う
ゑて。鶏のねくんハ行ふくるー

かくへきぜ敗乃れかさこをりまこ地とてこ後ハ面ゆ
きりをくと哭行ちに猿れ沈ゑれおりー面を小坂
あやのふ行ゑ
敬のむねよりくそやかををえう
れうしくがのためーせひ生れ行りゑ彼や鳥のひき
ねて沈の地とうりくれば猿ーくあり世治てあんとくへの
涙ちるゑ　西行ゑ
とーくをたすきて生て珠
猿のうえ
栗栖野　山城國醍醐のきこ也
さー枝のくすれ小野の萩去花

沈

ちりぬるまでのはなりてたむけん

そもそもあの山里に分入て侍しが。

そろそろあの苔の細道をつたひそぶらく侍るに。

ありがたきよりもなほ

ありたふ　開伽はるの梵語也

阿伽なるもの

わちらしらぬ人のあれば

なほしかるべしとてもあれ

なほとあれよりかれよりおかれ屋よりおわきあり柯よ

えさもたりくま　枝のたりも

まこと

かつてそれをかちうあるべき秋萩の

えさくんたりまとけりの家

こそかのことさあてはまるあるべ海のかとえとしう

同じ心ある人とおもあるに物語してかしきこと世の

うるあく　表裏ゆあくこと公庭を

のこさるあ義之

さやかんとうう迷うるへあるよさうあう海のかれ家たい

蕉さのはさん　かもたりれ

むよくの公はまくにちさま

さくんとむるひあるうん粧あるやち

義あるへー

やせんだひはいとんなの事とは

家ときくひはるあるかるぷ

ぷるたるふあもあん人こそ。

軽はやいとふかとあるそひよるみぷるうるるるとと

すこしかろ　いやかやとかいひ
あしそふ義之されたる庶民
らぬおもてハあきこ
ひれと記しうしさん
おりふ事のそそくこてまをぬき
ひれと記しき人しかるれ
天くこのりあり　由来りがき
むさしうるをハうへ共
安公座のるハいりと也

ここ火乃ことや　韓退之符讀
書城南詩曰
時秋積雨霽　新涼入郊墟
燈火稍可親　簡帶可卷舒

ハ世の人をなとする　辻史
平日讀書上師聖人下友群
賢仁傑曰蒹葭中方興聖賢
對何暇偶俗吏語耶
こよゆう　無疑とゆうこゆうるふ
きこハ雲よりとふ義之
文選　梁の武帝の子昭明太子
撰する所の六十巻あり
あれあり　あつそれあるへ
白氏文集　白樂天の詩文をあ
つめしう書へ
老子　姓ハ李名ハ耳字ハ伯陽又老
聃　ろもあつく世の人へ老子
經上下あり道德經ともいふ
南華の篇　莊子ハ又南華真
經ともいふつく老子ハ寓言篇

世乃人ハ我ともとなる
こ。こよゆうあるくさむ
きあれ。ぬこを文選
乃あれあるゆきく。
白氏文集老子
こと南華の篇。
おれこよ乃こせとも
ハこまるこ。ハ

と對して半ばうり
いかなる賢士 賢を得難の人也
いにしへの国の半とハなり文粹の大
くひあらハ

狂おうしれ 文武八帝位の文選
老子まあうして半ばうをおうし
きハおそーろさを
おそろーき怪 麻道法師ろいひ
ろハ多れやうよいこーきの
ものもとあとりみたそろ
ーきこのもみとのの床か
といひつるハやさーきを内ー
てやさーきこのをおそろー
くいひあすの半ばのりを

のあてあそれあうまおや
うあ梁

和哥ようれおうーき柏あれおや
しれをびこうのををきもいひ
出れおそーろくおそろーき怪
もあとのれ床といへやさーく
なねぬひこの哥ハ了ーおうーくいひ
うあへうりとえゆうあれとあうき

哀之 崇光天皇の孫ハ名
阿古久曽
弟よあろ あつまへまうりそろ
時ろうまてよあろ
いとまろ柏あ〜あくま割後の
まろひそくもおもかゆろれ

ゑとものやうにいうようや。云
業のあるはあれはきーれ云ろ
あ〜ぬ。あろそう系ようろ柏あうあ
くまといへろ。おと集の中れ哥
うりとやいひつくへられと。今れ
よれへのみみぬへきことかとい
ろてすぬ。世の哥あすろ詞れ
類れきおうーれ。哥のようかうりてく

[illegible] 源氏法華経より 源氏法華経より抜き書きする

いひそられるもたりかてー源氏の物語の物とかいふよとかきつ新古今まい殘る松さへ家よさそひきといへる歌をうつ海ことよみてけり姿まものやんゆんされとは歌ものろ松さへうさもーき家長 高野五の十代の孫法名羽院の時代に所の開闔法印人と系圖未詳

後判の時よろーきこうーさこあるとて後まも法文はかんし

作下されるは家長の記まうきりー家はみちのこいよしへよりてあるといふるもあまとーいやとものみあへ家あり河歌もむ

れ人乃よあるハ文人の同じものよあるーやとくもとあそまてーすることみきよけよ

未代に絶えすと見えさうとあり

いさや 不知と事をいはーよりうぬと云事をとかもてすとあり

うさゆへう 花をにこの拙とかを

不の歌をあつめうをいつり絶

因法所々文代は歌抜ありうをハ

羽のつき拉河歌へー

源氏物語抜 後の羽院御作也

祢樂催馬樂の歌をうひあつめるよ也 博物志云桑青撫節悲歌聲震林木響遏行雲謂其友曰昔韓娥東之齊遺粮過雍門鬻歌假食而去餘響遶梁三日不絶云云 故雍門人至今善歌哭效娥之遺

聲也これ故事をよるべきこと
ものと梁塵とこれ
杜佑通典云漢有眞公善歌
能令梁上塵起
郢曲　文選宋玉對楚王問云
客有歌於郢中者――
元稹梅詩郢曲琴空奏
郢ハ楚国ノ名ナリ見ル
哥儀と郢曲しらべ
とくさ　言雑とくさ

あられもかくもんゆ。河内国
秘抄の郢曲のこと。
あられふることおのうたまき。
むしの人をいうたいひたて
ふることくさ。みれいとく
きこゆるや
いつくるものあれ。ぞう旅立たるそめちひろひたれ。
をとりてかこ。ありきぬふひろ。

あとハいとめあれ事のこうあるう。新へ事とのを
をとめて文やること事の事侍宿を見ふなと
いひやうをおりくれ。やうれ。ぞてこう方よんつひ
ようきハくく　ようきこ地も山里ふ
とあとハ一きはよくろのこと
いふこと

せうるれ。てこ間家まてよきハく。
雑あるへ人も事ようハあひこうこ
ひてこをりこうもれ

尺ゆ丘寺　柿ふとよ西
非樂　天照太神天のいをと
とさーてこをりをひー附
天下いこやこるありくれ
八坂神いのをとさ狭くる

かくてこうふ海めしくおそーろ
くれおくこをのこをこ八ふ

天細殿給由さまのうつ
をうつくしうけをた
すきとしてうくひまひ庭
燎をたきーうことそ
ままうゝ又内侍所の御祈ハ一條院の御時うくしまろ
和琴　あつまとくもあつく着祈代ハ弓六張をあらへて引きくるをはよ
琴をつくりて六絃をかけて彈まろゝ日本伝の鄭笑のしらくう

山寺にいきこもりて仏をつくりて
あくぶはなをりもきよ海ろをとれ
つまやり　紡の字ハ倣紡をま
りゝ
かゝこき人のゝめハまれなり
孟子為富不仕矢為仁不富

矢　伯夷　叔齊　顔淵
閔子騫　原憲　子勢　南
華老人　五柳先生　流花
翁　陳後山ホの賢人まう
しくていやしきたくひお
かくり
許由　堯天下をゆるんとの時
ひゝれとも受をしてさる事
荘子はゝこくり
高士傳許由隱箕山以手捧
水飲之人遺一瓢得以取飲
之掛於樹上風吹歷枝作
聲尚以為煩遂去之
ありひさこ　和名集
云瓢奈利比佐古樹水器也

在張むさかりさんそいにしろ
き背より受人の富ハ海を也
をろこまま許由といひつる人を
文よ方ほをさうるさくゝ人のあく
てゆをもまーてさきて
飲ろ瓢をありむさこ
といふものを人のえさせさりは
きハ戎時本れえこにきこり

ゆのうちもしーうりえん

ゆのうちきさいありくんとえ

孫晨　蒙求云孫晨字元文家貧織席為業明詩書為京兆功曹冬月死被有藁一束暮省之晨卧朝收

こうりの人は後ろも侍よへうす

日かの人を書よかくるを

勿論くうも侍へまーはお

ーきとえ

ろうの風に吹きて鳴きろ哉。

うーうまーとて捨つへまもと

ひてうみも飲きろいくえうり

んのうち涼ーうりきん孫晨を

冬月よ梅を海ふくて藁一束

暮省ろをゆはこれなふ秋

まはおさあろう。唐の人を

いうーとをへはうぞるーとめ

扨のうろうゆ吸兼好ろう

抜来子源氏物語よ侍やうよ

いへともこ筆力入てうすし紫

二女の形管よりとしんや

をのわれハ秋ろう面され

表ふくて花のむしへ人よ咲ろうとけ

わーそひよ背ろう秋よひそろうん

愁苦就中腸断是秋天

やーまよ秋ーく　やうーくまよ秋ーくあろう

ろふうちろれハあよーうへき

みよーーーろう

ろうきまつ花橘のうとかけハ

むーうの人はそてのうーうろ

て世よも侍へけめ。これうの

人を後つよも侍へうし

扨ろ秋ーうろうとけと

よ表ふ花とけあハれを秋ろう

ゆ秋ろうまされろ　源氏物語秋ろ

ろう人ハうすまさろうろ　白楽天詩大底四時心

のうやろ　長閑とうきろ

ろう世二月のうろをゆ

海されと人をとよいはめきとそれ

もさろ和まてと一きはうろ

五月梅のこと　花橘の首尾
思ふハさつきまちかをるとも
梅の白ゆは首もこひしき
ふり

梅のはなあるゐ咲くもむしろ
おもひ　祇園社記のこと
咲ちりもかゝるれとかゆき
たゝそてふるー　やとの梅も
灌仏のこと　これらの咲のこと
を云ゝ灌仏は四月八日なとこ
ふるゝ仏佛生会八推古天皇
より始まる　釈尊俱毘藍城
ゆく生れ給ふ時天竜水
をそゝきてあみせ給ふー
事をとゝせ
祭のこと　賀茂の祭をつゝ

もうきこゝろの雲はれきー
ゝきよこゝあめれ　名はしらぬ
ふかとも
事のかゝはまきてのゝやうゐ
四郎　垣根はなをえ出つ流ゝ
やゝまつく震ゝ　花も
やうくきーれゝとこゝあき
わしも風ちつきてゝあハ
ゝしくらりるこねゝ蒸ゝ

四月四日　酒日をこふゝ飲酒
天皇ゝりそーまゝ　天平十九年
五月は勅ありて百官諸人
ゝくく菖蒲の蔓をゝく
へーかけさゝんゝの宮
中はへゝうゝさと定めゝ
弘仁式　五月三日平旦
は菖蒲　ゝもきなかと南殿の
内裏殿舎菖蒲事　文類聚前集云端午以菖蒲或縫或屑浸酒
早苗ゝ　きのゝゝさゝゝゝりしゝいのまゝいゝをもそゝと秋風ゝく
氷鶏のたくく　たくくゝ鳴ゝ　まゝゝゝひゝゝゝきてたく水鶏ゝふたゝかとゝて
いきぬゝゝん

あやしれ家はゝゝゝの
源氏夕貞巻はかの白くさゝ
をゝんゝゝゝとゝ作ゝゝのゝ

のきよりはよ花はおゝつゝあきゝゝん
ちゝゝゝすゝてゝゝひとゝてゝゝき

人めきてかくあやしく化粧せし
笑ひうとや
板葉夫
たつのおちきりいなせきかやりをよ
もくきあるものハタクケの花
詩学大成抄詩幾回揮扇摩
難到絶被薫烟即使除
六月祓　八雲抄云六月祓那
神をとろくへあそむろ祓よあそ
しと云こ河竜ないくしそ
わさの葉あとりそすもタ
ゐ衆もろことこ
賀茂川のみかをこ浩て照月を
引てうんとや夜くへもろ
乳いこふつきとくへしよ河葉ま
まろ引く月はあきをそ

まをり灌仏の注案の注
案の精涼　きよ義つゆく祓
こ世のあられも人の恵　さま
詩学大成抄詩幾回揮扇摩
難到絶被薫烟即使除
六月祓　八雲抄云六月祓那
神をとろくへあそむろ祓よあそ
しと云こ河竜ないくしそ
わさの葉あとりそすもタ
ゐ衆もろことこ
賀茂川のみかをこ浩て照月を
引てうんとや夜くへもろ
乳いこふつきとくへしよ河葉ま
まろ引く月はあきをそ

といくとをろを六月晦也を
こすみて照月也の義へ
あり定家口注云六月祓明
月こ由人義之古人六月之
比必出河原臨祓又納涼及徐作之遊及詩歌之興恒例也不限晦日是祓皆月
祓長元之比或人記所給小舎人未可奏皆月祓之由催之件祓六月十三日也
公事根源云大祓六月晦日百官ことくを朱雀門はあつまりて祓をすると
六月十二ゝひあり天武天皇のれはりり始ト品又今日家こと祓をこ
ゆろ事ま　こふ月のあこしれりくへまろ人をこ年の命のとひあり
ぱ家を唱ろとろ中伝へ行ろ祓は法性寺南白の記は　おとしをこつきは
とてあさの葉をきりまきりてもまくへつ水は家を祓とくへしとたくこり
六月南ろ時ハ祓は六月をこあへきこり東遊はたくこり
七夕まつり　昔こうり秋来
ことをいふ事り云事根源
云七月七日の夜をこふそろ天平勝宝七年ろりこりまろ乞巧奠とと
七夕祭とも云こ今夕ハ牽牛織女の逢瀬をまこと鳥鵲天河はきこりて

七夕まつりこうあはめこ
こ。

翼をのへ橋となして織女をわたすと淮南子續齊諧記にも見
えたり香花をそなへ乞巧奠とて庭上に丈をたて糸のはしに
五色の糸をかけて事をいのるに三年乃内に必かなふといへり此
故に乞巧とも申也　風土記曰七月初七夜洒掃中庭施几筵設酒脯牽牛織
女相會守夜者咸懷私願或曰見天漢中有奕々白氣光曜五色以此為徵應
見者便拜願乞富乞壽無子者乞子惟得乞一不得兼求三年乃得
やうく秋さむき　八月のほと
雁なきてくる比　月令云仲秋
之月鴻鴈來
萩の下葉色つく　季秋の比
也

やうやく夜寒になるほと雁なきて
くるころ。萩の下葉色つくほと。
早稲田かりほすなととりあつめ
たることは秋のみおほかれ。又野分のあしたこそをか
しけれ。いひつゝくれはみな源氏物語枕草子なとに事

ふりにたれと。おなし事又いまさらにいはしとにもあらす。
おほしき事　世説の序より
おほしきこといはぬは
おほしきこといはぬは腹ふくる
ちらゆくさまもおもしろきかな
るゝわさなれは。筆にまかせつゝ
是ハおもむきかれ人ハ拙いえも
有くあれをあるとおもそて
あちきなきすさひにて。かつ
ハらひのかれぬりきめ
かいやるまそへき　玄やるまそつ
やふりすつへきものなれは。人の見る
ふせ
をさく　頗とよむ也
すきまき拙すて
へきにもあらす。さて冬かれのけし
源氏あさかは葵に時くまつ
まて人の心をとゝむるなれ
きこそ秋にはをさをさおとる
葵のさかりもそのよ此
をめるに月に花のむかしあ
ましけれ。汀の草に紅葉のちり

ひろをこうあやしうえ
ふきとのく分ふしてい
世乃あれことさてそひふ
うされおとしろうもあく
れさものこうぬわあれす
さまーきためーよりひを
きろん人乃ふあさてよと
てみをゆきあをさせたま
ふ　河海云法の所云仮名
紙よすさまーきとのをて
すの月来おうふのけさう
又十別珍物よ十二月月夜
扇ふあり

佛名　十二月十九日ろう
廿一日さて三ろ日あう或
一夜も例あり此仮名云を

そまるて霜ひとろうをきう
あーたやをとあるり煙れ列こ
うたうーきれぬほれたれてて人
ことにいうきあへるにろ海ふく
あをれあろ。すさ海ーき和よー
てをろひをれふき月のさむ
けくすめろ。世見ーのまりれをこう。
ふかうきをのあれぬ仏ふ前の

三世法仏の名号を唱へて六根の罪を滅さろ仏道法よとろふく
ところの功法ハをろうあきこや室亀五年十二月ようろーまう兼和の比
八毎年仏名三ろ日の間ハ法国まて殺生禁断のよー格よ又ーろ多く
公事根源よ載さり　元亨釋書九釋静安從西大寺常騰学法相嘗居比良山
讃十二佛名經礼拝修懺其聲動帝畿諸列間有聞者見放赦賜僧官兼和五年
巻置宮中季々佛名懺

荷前　十二月吉日を撰ふ先十三日小法ろさくとろて定ろ使ハ云卿の中殿
上人のもあり荷前とハ十陵八墓よ年の終りよ幣帛をまーせ捧ふくを十陵の
才一を天智天皇れはさくき山陵国山階にあり昔比帝御馬よめさ迷て山を
ふの里よ行幸ありてそのまく還り法ハさりき仏ろよ崩御をいはくとも
ろろ人ろ一惟方昔のをちとくまりろ雲陵をろーそくろいと不思議ろ
ろしとまて伝りき其ろハ白壁天皇の田原のみさくき崇道天皇の八志まの陵
仁明天皇深草乃陵ふをく
さのこハをるすよ及ふす延
喜式祈年の祭乃祝詞よ荷
前と出てそりかをよめり

の仮ふろとうぬをれよやんと
ふき公事をとの志ろくまれ

云事　禁中不行ひてまつり　いきさまりかたのてをよりて
しる　　おこふたりてさまたうしこ
追儺　公事根源云十二月晦
日行ひ今日八ものやらひ米
あれて大舎人寮鬼を作り
め陰陽寮祭文をよみて南殿　きやつ追儺より宮方祭をつくく
の追ものつきてよむ上卿以下足をふみ殿上人とも御殿の方をうて挑の弓
葦の矢をもていろ仙花門より入て東庭へて射矢戸を出つ今年御所ふり
ものを矢をもていろ仙花門より入て東庭朝餉墓盤所のまへのみきりは燒墓をむ下
ものを矢を多くとりすて東庭朝餉墓盤所のまへのみきりは燒墓をむ下
あくこそくとをすく追儺と云八年中の疫氣をはらふかく鬼といふ八方相氏
のくとくに目をあておそろしきをあら面をきてくまは揩殿をころ又侲子と
て廿人紺の布衣着ろ赤を幸て内裏の宮門をまりくく慶雲二年十二月
は初まり以来天下は百姓多く疫癘は惱されけりー殺
宮方拜　云事根源云元亀乃寅代時天皇厳星をとろく天地宮方の山陵を拜ふて年
災をそんくい宝祚を祈ナさろ　義をてはるやい事いつそりまりとも見くすに
和五年正月寅刻は天地四方厳星山陵を拜ー給ふ由宇多帝の御記はあきと溢

解　くします文皇極天皇雨を祈たまふとて南列河上は行幸あるて宮方
を拜ー給ひ八雨五日まてありきろ由見ゆ記は載されて是あるとや始
くしやへうくん其上厳星を拜して災難を除く越八天地瑞祥志とてあまにも
ふくくろり　足とそまるふ　いろりくありくくを云
ふき人のろ巻とそ　ろきれつこをり乃
むまろ幸れたりは交はくろ　ものこくてきは松とをそ
くふまそまるあくんとをくん　巻ものこくてきは松とをそ
みハ鬼鬼と云　　して巻ますくはまて人乃門
明ゆく年のきき　年れ除　まてをいひつくてみまは
まてをいひつくてみまは　きはーつとあるきて御事
五ろくくくとをくはは　よりあんをくくはをくて
は除の餐編は打芸のろ　ものこくてきは松とをそ
ろりくとをいーくろ　ものこくてきは松とをそ
れ慈ぜりそんふ文をは出　ありとそくよ海とふで嘆くくろ
ふも男女まの文法は文ふ
らは是を幸山の蛇の首尾

相撲ふとりふ又此ほ秋と冬
との間に源氏抄に手紙の所
をひくもゆるやかまし
てつまらぬ筆法也
大路のさ行松まてほし
素戔烏尊の南海へかよひ
給ひし時宿を巨旦将来に
かり給ひしも借かりま
らず蘇民将来やどをかし
まいらせ給ふいかりて巨旦
ところし其家をやきほろぼさ
ぶこれを後の世までのちに
しとせんとて巨旦か墓の上
に生たる松を年の始に門
にたつる也晴明か簠簋
内傳にみえたり

さすがに音なくありけるにや。まづ
のなかばもむかしのなごりかきる人の
ならとて玉まつりさはこれ
此難にはなきをおもはまほしさに
八朔さるとこそあれらしき
うちわすれたりかゞて咲り出し
きゝれ明日はかたらひくらしとは
見えけとゞきくためしも我

此世のかぎり　古今に
世乃うきめみえぬ山ぢへいらんには
おもふ人こそほだしなりけれ
とゞまらぬ月に　とゞまらぬ月之
そゞろなるこゝろ　雲月風雪に
に使はしきことゝ李白豪
放乃謫仙人なれども餘春
を惜むことあり

むちうすゞ大路はさゝ松たて
ほとしてさやかに過しきをなを
なんまさあはれなるを
丸 なほにしとかやひゆ世たて人のほ
をしれくこゝろとゞまらぬ月ただ名
はなはたれきとひとえ。
ゆくとまるもえぬべきは
圭 二万たる実月こそぞあくなむ

沅湘日夜　三体詩戴叔倫詩

沅湘日夜東流去不為愁人任少時　註云身不得去故怨水之去所以深傷己之不能去也蓋叔倫事曹王於湖湘有是作恭少游詩郴州有詞云郴江幸遶郴山為誰流下潇湘去正用此意　沅水湘水皆水名

嵇康も山澤よあそひて

文選巻四十三嵇康與呂壽絶交書云游山澤觀魚鳥心甚樂之一行作吏此事便廢安能捨其所樂而從其所懼哉　嵇康字叔夜竹林十賢の其一人也晉書小傳あり

人遠く水まさりぬ　玄賓僧

秋の来ぬ

ふる雨ハあまきよみとも思ふ

秋のうらハすゑぬまされる

山沢よあそひて魚鳥をそれハ

ものいひ人とくらしたるあくさむるハあしし

本乃乃れたくゝ　大工番近

の類ゝ

文の詞　文章或ハ往来消息

とゝ

反古　反故とも書くものと

成ゆくめぢかれたのうゝ

ゝきちゝゝゝゝゝゝゝ紙

をつふをの多くあつめうゑ
ゑ及故堆とゝふ撰録ま
ろこゝう
くゝふ河　平生ハ常陸こ
主殿寮人形ゑて　立敎つき
ハ夜の形章の時火ををけ
ゐをつさとう
最勝講　一条院長保ニ年五
月七日ヨ始てをこあそう
吉日を撰て五ケ日あり清
涼殿ゑて最勝王経を講せ
らる東大寺興福寺延暦寺
園城寺ニケ大寺の僧ゑ参
ゐてをこゑあり法華講
師強所あとあり云事根源
ゑ祥也

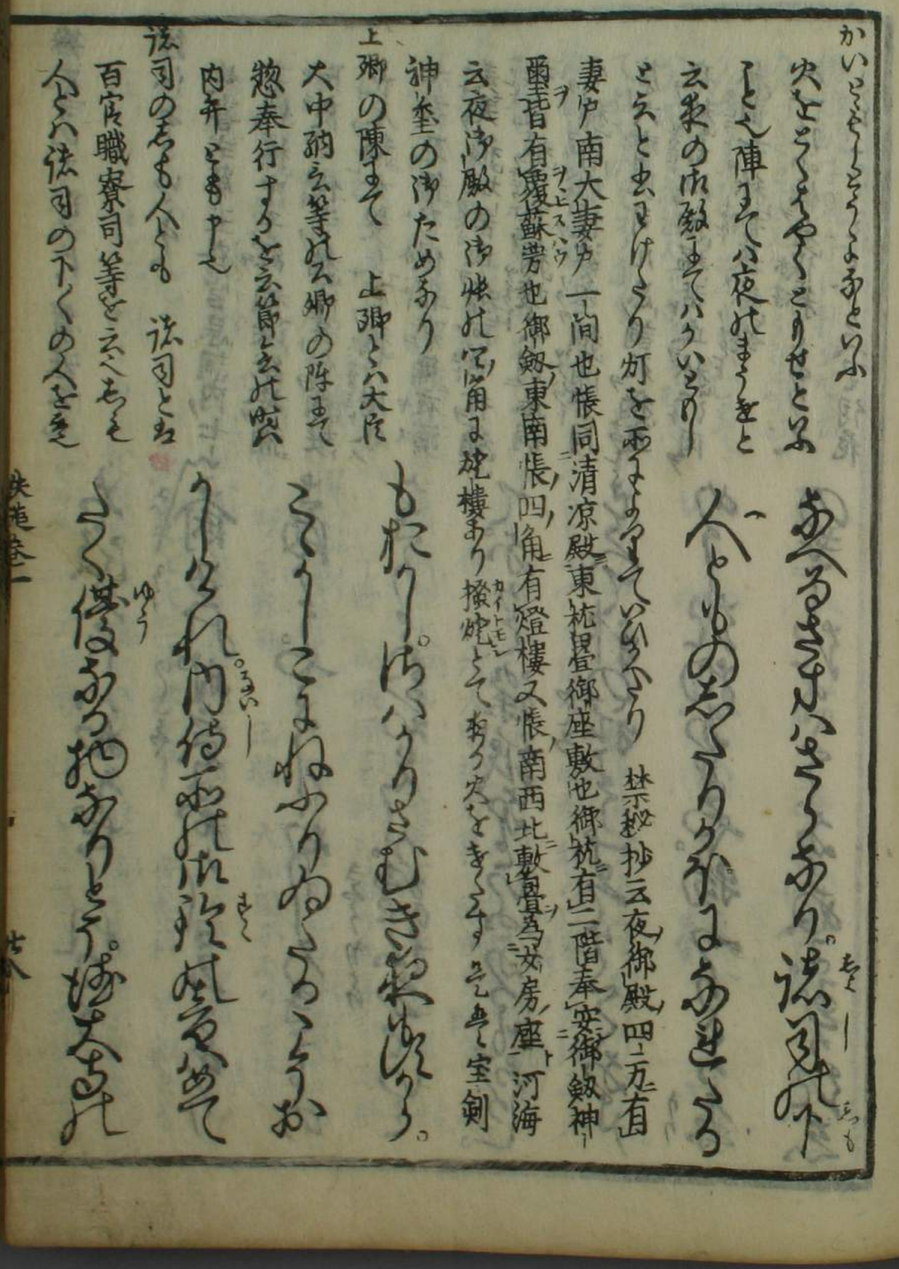
のつこきこつこきこつこのも。古代の姿こそおゝしとゝん
ゆきゑの河をこう青れ反赤
ゝも。ふこきこきこゝふ河を
くちはこうこあうこそゆく
あれゝふ人ハ車をこひゝぶく
きゝとこゝひゝと。今ゝ代人
ゝてあきゝかきわきゝとゝふ。

沙こうめこう　沙講の所也
最勝講の綸旨を交名所を
云所ハ別りとゝあり関白
の門裏ゑて休息をう所を
直所とゝゝこと直ハ宿
直の義こ

九重　紀内を云一条ゑ
九条まてあり長恨哥ゑも
九重城闕とつゝ
よつゝす　世をゝあれこゝ義
露葺　門裏沙敎の間ハ名こ
紀納　清涼殿の門ハ南にあり
紀納間二間也こゝゑて紀
件沙をゝまこゝ南ゑ平敷

立敎寮人　教ゝてとゝふへき所。
ちはこゝちくせゝとゝゝ。最
勝講の儀式ゑ沙こうハ
こゝとこゝふこうこゝふ
とこゝ物こき人ハ作らせて
たこゝろへこゝ来の世とこゝゝ。
九重ハ物こゝひこゝあり法こう。
つこゝすゑてこき地あれ。台

二枚東西の帳の屏風を立夜
御殿北方に副障子あり屏風
の内かた御調度を置く禁秘
抄河海をとる併也
あふ殿あすか門　一本にあふ殿を
南殿とあすハ非之門裏の殿
門数多あり故に一くまさぬ
をいとねもそもそハ禁秘抄拾
芥抄ハ見えず
小板敷　公月抄に神仙門中
を云今ハ殿上にあり
さるき戸　今ハ清涼殿の坤の
廂下の間にあり
陳に夜のまうけせよ　設ハ施
かとと用意することなり
をとハ灯ともかまろへうに



かいとりそうよあとりふ
次とそくそくそくこりせとふ
ことし陣まて八夜ぬまうをと
云夜の内殿まてハういとり
とえとをとけうり灯をあるよう
妻戸南大妻戸一間也帳同清涼殿東北畳御座敷也御枕有二階奉安御剣神
璽皆有覆蘇芳也御剣東南帳四角有燈樓又帳南西北敷畳為安房座河海
云夜御殿の御枕ハ角に施樓あり掾燈とて多くとき立すそ也宝剣
神璽の陳まて　上御とハ大臣
上卿の陳まて
大中納言参議ハ卿の陳まて
惣奉行すると云節と云ハ
内弁ともいふ
法司のもの人々　法司とハ
百官職寮司等を云へもも
人々ハ法司の下くの人を云

あへるさんふさうあり法司の下
人々ものそうりかよあをさう
禁秘抄云夜御殿四方有
御枕有二階奉安御剣神
璽河海
宝剣
もたりぬうりさむき秋ぬう。
そうこうよねりのうこうお
うりうれ門結ぬれ於其者て
うく供あり地ありとうぬ大ふ

德大寺の左大臣　實基公也

法隆寺のいとなみ

延喜式第五斎宮忌詞内七ゝ斎王　ものの沒大臣ハおそせられる

言佛稱中子經稱深紙塔稱　ものまいりまする

阿良々伎寺稱牛草僧稱髮　さかなやさくりろきこと

長尼稱女髮長齋稱斤勝外　きりとおやてう法仏をいこ

七言死稱祭保留病稱夜須　てぶつこ深紙をいふるもの

美哭稱塩嵩血稱阿世打稱　てぶつこ深紙をいふるもの

撫肉稱菌墓稱壞又別忌詞　てぶつこ深紙をいふるもの

堂稱香燃優婆塞稱角筈同　てぶつこ深紙をいふるもの

第六齋院司九忌詞死稱直　てぶつこ深紙をいふるもの

病稱息泣稱塩嵩血稱沂肉　てぶつこ深紙をいふるもの

稱菌打稱撫墓稱壞　てぶつこ深紙をいふるもの

又一説ニ佛稱保稱とあり又　てぶつこ深紙をいふるもの

ものきれのてあるぬるぬるぬるぬるぬるぬる

集雜說ニ選子内親王歌　日ぐらしてぶつきよゆふりきるかこ

のいつきとせえくるとき西まむ　いとうるぬるぬるぬるぬるぬる

くひてよめる　せくとゝいむそ

いえぬとあさえそあさえむき

てはをのこゝろあく　榊ゆゆしかりけり

抄榊くゝよゝゝくはあとゝ　榊ともゆゆしかりけり

ゝと也　伊勢　天照大神の朝　賀茂　雷神ゝ下賀茂ハ御祖神也

卜也上賀茂ハ別雷神ゝ　春日　春日四所大明神者第一殿武雷命第二殿

齋主命第三殿天津兒屋根命第四殿姫大神也　神護景雲二年大和國三笠

山ゆゆしき神ゝ　平野　山城國葛野郡ゆゆあり延喜式ニ平野

神ゝ座今木神又度神古國神相殿比賣神とゝ　住吉　日本記仲哀天皇ゆゆ日向

祝原まて祝ゝ　三輪　大和國ゆゆあり日本記ゆ

素盞嗚の子大巳貴神を大國主神ともゆ其魂魄出雲國ゆゆ大和國三笠山

へゆゆ祝ゝ　貴布禰　半船とも

ゆゆ山城國愛宕郡ゆゆあり　豊布禰神ゝ　雨を祈ゆ社を祭也

吉田　此社ハ春日明神を勸請ゆゆ　大原野　此山を小塩とゆゆ文德天皇

時始て式祭を行ひ春日と同体也春日八社を斎ぎ故不后妃夫人手洗のたりあんりた
めにうヒヤさるこ　松尾　大宝元年秦朝理くーめて社を立てり　日吉
三瀧　當社　皆同体の祢也
延喜式第九神名帳山城國
葛野郡松尾神社二座とあり
梅宮　山城國まあり橘氏の祖祢こ

伊勢　賀茂　春日　平野　住吉　三社
宇佐　石清水　大原野　松尾　梅宮

あらし川の渕瀬　古今
世の中はあるよりまさるあらし川
はやのみちうきこそ水瀬とあり
あらし川みちはせよあろ世ありとも
さひそめてし人はもれしー
時鳥　又同序よりきうり
こゑさうりあるこゑ
ゆきうふともこのこゑ
あるこゑや

陳鴻長恨歌傳時後事去樂
盡悲來
野原也萬象草の子
伐の〜と後又野等とも
生ゐ
里人あり立て人はかりよ多ゐ
庭も荒雖も秋のむ〜ゐ
桃李ものいはは　史記李廣
傳賛桃李不言下自成蹊
菅三品詩桃李不生言春幾春
煙霞無跡昔誰栖
糸極殿　拾芥中未云京極殿
土御門南京極西南北二町
被入道長家或大入道殿家
上東門院是也
法成寺　五條河原よあり後

ゆ雖ともあるむ〜をうこん
おてこねいよ〜のやんとあり
ひきん沢のこそいとんうあ
京極殿法成寺あとろこう志
とおうと家〜ゆきうさ成
あるゐあ池堂殿他ろうせ
ひて庭園おくうきこれ我法
そうれこ沢つのれうしろこ世ゆ

一條院行幸し給ひしことを栄花物語にまかりて極楽寺へ宇治関白頼通公をとみ給へと道長公の御遺言之
志をとゞまりし事ならし　昔の五人の悟れ世までとおもひなくし志ハそこまりしを事終ハうつりかはるこ之
広園多くよせられ　道長公御病中に法成寺へ広園あまたく寄附せられしと栄花物語にあり
我御すゑのこ　我れ曾孫也
帝のはうしろみ世はかさめ　攝政関白大臣などの義之
金堂　倭名集云佛殿金堂也

めでてゆく末までとおもひしときき
しけばかなん世のはかなくりあせ
えてんとにおりしてんや大門金堂
おとちくまであるしと正和の
比南北門きやきね金堂は其後
たふれしまゝまでありさる
又こもなし無量寿院ありける
もろとて持たる丈六の佛九

風雅集にかくよめり　且法成寺に参りて詠侍りける
くもりなくみがきおかれて玉裏ちりもぬるときものを見るかな
正和の比　花園院の年号之
無量寿院　法成寺にありし阿弥陀を安置せられし故に無量寿院といふ　仏九體すへて九品の浄土をうつしたる事相なども上品中品下品ありめでたき院作られしと世継にも見えたり
丈六　仏のたけ八一丈六尺あり
かくれの名残　今はなき寺なれのこしくなりにけり　法成如此　況や其外のはかなきこと

神なとたらとくておもひおかし
ますず所感大師の額かゝみゆきさる
かきる扉あきやりはんゆうき哀あり
法花堂なども　いまゝ侍るめりき
も又いつまでかあらんかゝるの名
残たまたまなとハその
すべての残るものあるまじきとさとりなば
志あらん人もあし　さぞまたよろつま

人なき也
風も吹あへずうつろふ人の心かな
古今　貫之の歌
桜花とくちりぬともおもほえず
人の心ぞ風も吹あへぬ
色見えでうつろふものは世の中の
人の心の花にぞありける
又世の中にあらゆく　世の中の人の心
にうつりゆくはあはれとはおもふ人の
別れもつらくぞおもふ
白き糸を染ることをなげき
高弁上人白絲を人の心によそへ
られしとよめり　風雅集に
むかしより人のそめけむ白糸の
そむきそうるまでなほまたうしらん

見ざらん世までなほぞひときてん
ようひとうつろふ人のうれ
風も吹あへずうつろふ人の心花
かはれなり年月を思へば哀ときこし
云れ契りもよしはかね抱くらう
よのかよあはりゆくなかひともおもふ
人の別れるまでもさりてかなし
き抱なれ。さもハあるき糸をそまん

淮南子曰。楊子見逵路而哭之。為其可以南可以北。墨子見練絲而泣之。為其可以黄可以黒。高誘註曰。憫其本同而末異。
堀川院百首　あまたの百首あり
初度の百首ハ権大納言藤原
公実勘進之そにひくむり
見ての名ハ利公実卿の歌也
蓬莱の歌之
伊国ゆづり　天子の位を春
宮へゆづりたまふ時の歌也
譲国とも伊譲位ともいふ也
斂塞内侍取　光を三種神器

よも絲のすぢとみちのちまたに乃
見るまんことをなげく人もありけん
り。堀河院の百首の歌の中に。
むかしいはゞ糸のいたづらに
つまにましまれすまれのにて
さいむ袖色ことを待りけん
九七 伊国ゆづりは春おこなはれき。
斂。重。内侍所。はじまるを

とやく剣ハ宝剣之事 天叢雲(アメノムラクモ)剣之事ナ 璽ハ称璽也天照太神天の石窟(イハヤ)
おこそかなる世のはじめ時読人いはくやて天の香久(カク)山の坂樹(サカキ)の上枝にかけさせ
八坂瓊(ヤサカニ)之御統(ミスマル)之事をいふ八
坂瓊の曲玉(マガタマ)とやす天照太神
八咫(ヤタノ)鏡(カヾミ)とちひあひ時流
鏡(モトリ)小まとひつきさ多ひ
けり給く

内侍所 異本ともやす神鏡の
ことハ八咫(ヤタ)鏡共真経津(ニフツ)鏡と
もやく
新院おりゐさせ給ひ 流位ともお
りゐたまふ
このかりのとなれやつて 主殿
寮の下司とも禁中の掃除(サウヂ)
とするく
きものやつて とも八伴氏などの

ゆかしきあらたなりけれ。新院のおり
させ給ひての末よりまた給ひきなふ
とりや
昔はもはものなつことよそよそにて
立ハ夜は都にもしく
今の世にてとさきにかはれた。
院は人のためにもあまたさくびき

主殿寮の下部とあることや
つく神殿乃字之
倚廬 神忌ならあ之塩嚢抄云
諒闇の時ハ皇居之以旨易月と
て十三日神忌あり
何れ子塩嚢抄云倚廬ハ板とハ
いつしきをさけ葦(アシ)の簾(スダレ)布(ヌノ)の木
多く凡太刀平緒(ヒラヲ)其外装束等皆非
常也 一説にみすを翠簾(ミス)とかき
布ハりくを布帽額(モカウ)とあつて木の
おけあつもつやうとよめりるぬ説之
太刀 平緒にて銀のかな物之
平緒 三重に黒漆あり
ゆしき あくまてハ墨し
きとく

あまりくる程なう人のためにもあるれ
ぬへき
諒闇(りやうあん)は年ころ気なる事(あまれ)ハあらし。
いろのかたにさ海など。板敷をさけ。
あみれ簾(こす)をかきて布は黒ふうう
あらしく佛洞(どう)度(と)をもとつそう
ふされ今の待ち給くおふ平緒(ひらを)ま
て。更(おとやう)摂あるうゆかしき

るすりかうの　拉ぎまつにたふ
しかうこひきはりのくるあそ
ひむいふあきひのてうと又打
うゝ式長ゐるゝ人のきつまゝ
ゐるはさゝ出ゐる
人ちのまるてのち　人のね
まつまりうゝ　後漢書列
傳五來歙書曰臣夜人定後
とあり
ゆさむ　ゆさひの家之ゐ
さむひようゝ
ゆくゝ　ようつの乃具也
ゐきゝ人のゆゐひ　彩捨さ
江伯臣ゐまりけう男出
ゐゝ伐ちりゐめてやり
つとてゝゐる

文選五十六潘安仁うゐ子
楊仲武誄曰披帙散書屢翻
遺文有造有写或草或真執
玩周復想見其人紙劣于手
漱雪于巾　白樂天感舊詩
卷詩夜深險罷一長吁老淚
證前温百百二十年前舊詩
卷十人酬和九人無

中原　人死して未来生れ中
間より先五陰のうちをはる
故ふ中陰と名づく五陰八苦
更想似微ゆゝ或ゐ一七日
乃至七ゝ日のあひだ仏すを

脩まるゝ之 随氏浄去論并無
常禮筆まよゑてあり
心あるべし 涼氏よまきまゝ
会涌きまひておかしきく
られうらせところあそ
ことし
河海よ 心はとかりしき義之
周章 擾
かくまいふきをいゆところ
をのまもるね 物ふことへん
あり
そての日 四十九日也
ゆあかれぬ 散と出てあ
りあくせよ先りこゝまて
出し別とすあうこ退散
をかゝ依之又よりのあかや

なぞ。にのまきとしはふとあへる
心あるべし。日数ふやくもとくる
頼もし物まにね。そのほいはとふ
さきふうるひよいふかもなく。
我かしこけよ物むきまてめぢらく
ふゆきあられねどものすまりに
今まてうきにけかしき事ハおかう
るへや。おぼつくの事ハあふがしこあと

いひよろをあらいもふ
時去りとあと通まろぬ
うあり家くもよりあぎ
あかへし
たりくのこと 日本紀よ云云
とまて志かくとよ先まで
河海よいろくのいひとく
云義へ 史記汲黯傳上曰吾
欲云世所云とあり又然ことまて志かく
あふりし 下学集曰究賢上古時倭漢両国未知家人居士寡悪虫螫人故本朝
書札宋相御曰究賢言士寡之究賢閉塞可防悪虫ヲ 無悪といふ字ハ戦国策よ
まむさり何事もふきうといふ詞之流まこえ世俗の消息乃末よ究賢
とまえまい事事あつとあ
てたしもいふひなるへし
書簡尺牘の書尾ふ自番保し
番自麦至祝珍重ふと出り

のためいむなることおしふといへる
よう。かくり此あくにゆくえと人乃
心は程うそておかゆき。年月へて
も家子ろてまあへねどもる
を此めでにうとしといへることを
まいさいなとをときへなりぬおほく

ことゝ文字よりよりて先
うまくてと云義もあるへ
ー
かゝりのあるにあらハ かゝ
そうら表傍の中すと云
義之
年月へても　源氏玉鬘
年月へてもぬきとあら
さるゝ夕ゝの多ゝ
拾文
さうもぬハ日ゝにうゝ
文選二十九古詩曰去者日
已疎来者日已親出郭門直視但見丘與墳古墓犂為田松柏摧為薪白楊多悲
風蕭蕭愁殺人思還故里閭欲歸道無由　詩曰去者謂死也來者謂生也不見
容貌故疎也歡愛終日故親也　少えいへと　上の年月へてもまれぬ　云
まあさつてのの詞之ワヨレぬと云そのきゝそうりかえねまやむさゝ

ぬるまやのあるといひてうちも
うまくてとの義もあるへ
ー
かゝりのあるにあらハ かゝ
そうら表傍の中すと云
義之
年月へても　源氏玉鬘
年月へてもぬきとあら
さるゝ夕ゝの多ゝ
拾文
さうもぬハ日ゝにうゝ
文選二十九古詩曰去者日
已疎来者日已親出郭門直視但見丘與墳古墓犂為田松柏摧為薪白楊多悲
風蕭蕭愁殺人思還故里閭欲歸道無由　詩曰去者謂死也來者謂生也不見
容貌故疎也歡愛終日故親也　少えいへと　上の年月へてもまれぬ　云
まあさつてのの詞之ワヨレぬと云そのきゝそうりかえねまやむさゝ

そうりあるといひて　ぬるまやのあるとも　きハそうりとよとふ　きハそうりとよとふ
心之　かゝハ　死骸之　源氏桐壺よむあり　はれゝゝとあり
きゝとき　河海よ氣疎と云
王形そうゝきゝ之
卒勢婆　翻譯名義集第七卷
增波西域記曰浮圖又曰偷
婆又曰私偷簸皆訛也此翻
方墳亦翻圓塚亦翻高顯義
翻臺廟刘熙釋名曰廟者貌
也先祖形貌所在也又梵名
塔婆殺軫曰訛文元無此字
徐鉉新加云西國浮圖也言
浮圖者此翻聚相戒壇圖經
曰原夫塔字此方字書乃是
物聲本非西土之號若依梵
本應屬佛骨所名曰塔婆

そうりあるといひて　ぬるまやのあるとも　きハそうりとよとふ　きハそうりとよとふ
心之　かゝハ　死骸之　源氏桐壺よむあり　はれゝゝとあり
きゝとき　河海よ氣疎と云
王形そうゝきゝ之
卒勢婆　翻譯名義集第七卷
增波西域記曰浮圖又曰偷
婆又曰私偷簸皆訛也此翻
方墳亦翻圓塚亦翻高顯義
翻臺廟刘熙釋名曰廟者貌
也先祖形貌所在也又梵名
塔婆殺軫曰訛文元無此字
徐鉉新加云西國浮圖也言
浮圖者此翻聚相戒壇圖經
曰原夫塔字此方字書乃是
物聲本非西土之號若依梵
本應屬佛骨所名曰塔婆

よすう　そうう　そもそもこれとふくうせそ　そんもみこそ　そのふ人もかとふくうせそ　ほそ　侍るそうれ
いつ里の人とあをそうそうれ

白氏文集　古墓何代人不知姓与名化為路傍土一年春草生

其うそうそうあく　そうそうち　て四とありぬそうそたうあく
うそうあくありぬうそうう　うあ　ぬうそうあ　ぬ
うあくきうそ

人のうり　人のそうそ

許れまく

おりひるいもかりゆけ　あれ　あ
河風さむくふるひくあり

雪のおそろうはうり　朝人の
かるといへる事あるとて文をやふ
うて雪れとのとしいへさうに雪いうそうし

一筆の給をぬかむうしうん人の作らる事。
きく入へなく雪とは行れたりといひうも
うそ行うりうしがいつ月をあれ人あれかうり
れしともはもとれうく

九月廿日れ況ぬうく人のさうそう里
あ　あへせうをて　家内をせ
さすうく
れしとさ海のゆうる　事柄の
侍まく

侍みおりいつふあうそあ
せうをていつとあのあれぬれうを雪れ家志れみうそと

あるあぬ白ひさあるやうにてにたるうるはしく
いとはあるべしとぞ紅のひとへにてなのひとへ
さきのゆるおかへえそ拾はれうしたるーーー
わうらはたさとうはなかすーをーあきく月
ひろきーきややうてけこもまーうえはれうう海
はるかうあるとしへうはかあれ東八ゝ弟々あるつひ
おうらへーをーあくえをうときてはりし
遷幸　彩殿へ移てきーを　今の内裏つくり出されて御儀の
云なり

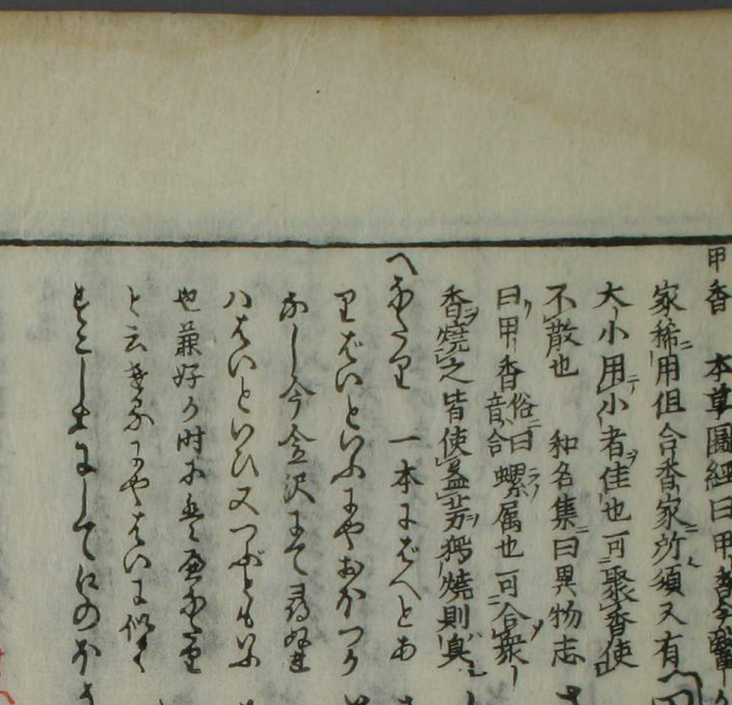
玄輝門院　伏見院の母右也
洞院山階左大臣実雄公の
女也

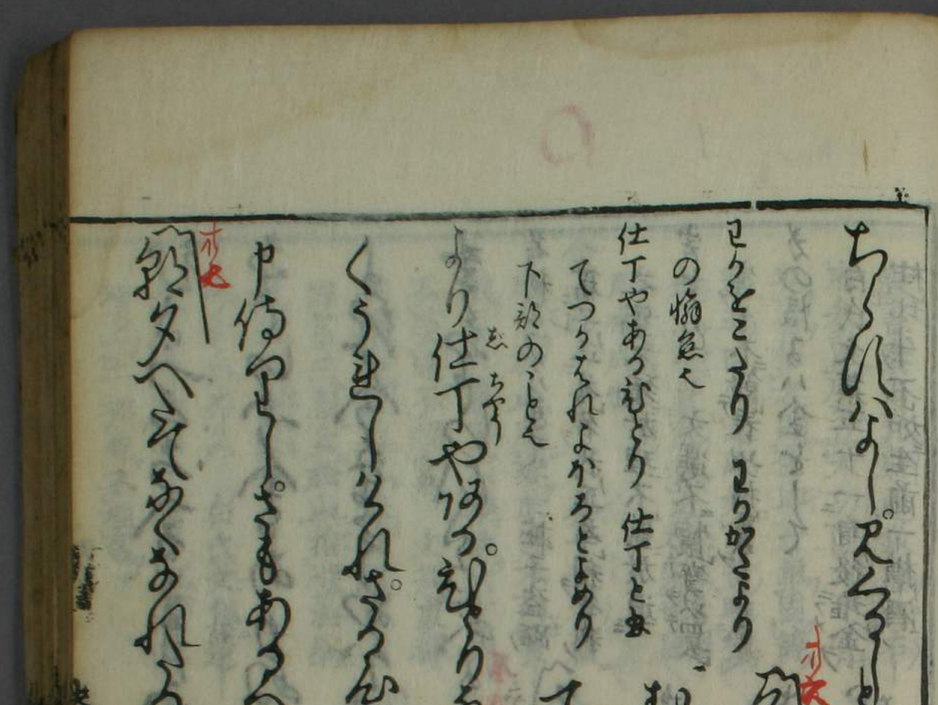
閑院　拾芥中末云閑院二條
南西洞院西一町冬嗣大臣
家金岡畳水石公季公傳領
之

えうの入て　葉のまあるく
しるの葉の松千葉むすあ
へ昇字の志あるへ

人こはんせうれうにつるる雑
あるとて院遷幸以ひらくあり
きるよ玄輝門院れうんて宗院殿
けうりれ完ぱまるふちゆあく
てそありしーとれうらうり
きるとにしへえうのいるとて本そ
ふうはちうりうれあやまりよ
てあはれはうり

甲香　本草圖經曰甲香醫[illegible]
家稀用但合香家所須又有甲香[illegible]
大小用小者佳也可聚香使
不散也　和名集曰異物志
曰甲香俗曰螺屬也可合衆
香燒之皆使盛芳烈燒則臭
へあるなり　一本よぐへとあ
ひぐいとらふあやおかつら
あし今金沢まて弱ぬ
ハぐいとりひ又つぶともふ
也兼好ノ時ハ甲香ヲ
と云事ふつうやたいよ仕く
ものしよりてにのかう





えもきつてろへるさまにかんゆうこう今さらかくやハ
あるしらんもありぬへきをきとおをきをよくしく
よれんへるをうおかゆうこうきさんはしらちをきろ
事をいひろうぞよ本人とをひつきぬへー

名利はつハをて　荘子盗跖
篇子正為名我正為利名利
之實不須於理不監於道
害をとり　文選不懷寶以置
害を不飾表以招寡
分の恨ハ金をして
白氏文集五十一身後堆金
柱比斗不如生前一樽酒
残まの涙ハ海と害をかひ水

唐書秦王引尉遲敬德為右
府參軍屢立大功隱太子肯
以書招之贈金皿一車固辭
秦王曰公之心如山岳雖猛獸
金至斗豈能移之秦王者謂
太子者太宗也隱
尼處成也

金ハ山よりすて　荘子天地篇
藏金於山藏珠於淵不利翼
戝不近貴富不樂壽不哀夭
不榮通不醜窮　文選東都
賦損金於山沉珠於淵
同第三藏金於山投璧於谷
註云抵側數也

うつをれぬる　白氏文集遺
文三十軸軸ニ金玉声竜門
原上土埋骨不埋名

とまをくおつたちやかれはよハ金
沈て岸をさそふとも。のため
ろう見つくるへよ。ろうあろう人の
目をとをこそむろうのみそ
あちきほしそふ車肥ろう馬金
むれのそうも心あん人ふそをを
ろうあろうとうんろへよ金ハ山よ
すてぬハ淵よりくへし利はまとハ

おろかなるとかき人も
父祖の蔭なくしてなほ不肖すれどもろくあるひとつきれ
のこの孫も官位よのかぎ
ことありむりに官を
えらばしめ用ふ
ほ世をこえよろこ来るを
例とす色を世官と云善
改よあらず
賢人を人こりうしやーき
位よをる
孟子萬章下篇為貧者辭爵
居卑辭富居貴辭貴居卑爵
富居貴惡乎宜乎抱関擊柝
孔子嘗為委吏矣為乘田矣
人の少をよろこふ
莊子逍遥遊曰挙世而譽之
一賢人世人をつくいやしれ

而不加勸挙世而非之而不
加沮定乎内外之分辨乎栄
厚之境
誉ハ又そーーのそとあり
韓退之送李愿序與其譽於
前孰若無毀於其後與其樂
於身孰若無憂於其心
ものほれ名
通鑑魏主獻曰選挙勿取有
名如畫地作餅不可啖也
晉書張翰曰使我有身後名
ちろも人のきく酒よろこぶむ
不知昂時一杯酒
智惠ないてくハ偽あり
老子曰大道廢有仁義智惠
出有大偽王分南註曰智者
知也惠者察也以其有知有
すつくきん人をすまやにさる人

察此大偽所以生也息齊詰
曰不肯而又有小智小恵者
竊仁義而行之則偽自此滋
乱自此始　又老子曰絶聖
弃智
煩悩　大智度論曰煩悩者能
令心煩作悩故名煩悩
又曰属愛属瞋属癡是名煩
悩大蔵一覧詳
可不可も一條也　荘子齊物
論曰方可方不可方不可方
可　又曰可乎可不可乎不
可物固有所然物固有所可
無物不然無物不可　故道通
為一　是善悪是非可不可
邪正曲直邪正一切世間

雑とくんち能よう志てまんこ
とをねくんがまれ文そしてとの
なかりかの後れ故に得つさそさう
小益あし覚をねらふも深きとる
色。くし志みて智をもとめ
覚をねらふ人のためよいて智恵
むつくいつりありき猴も然え
悩の増長せるやつとへてき学ひ

の物備を討ねるの志之
何をる善とは　天台止善ー
悪不生六祖の不思善不思ー
悪とあるは通ずべし
彼との人ハ真人とも
逍遥遊曰至人無己神人無
功聖人無名　梁武帝達磨
僧達磨曰無功徳
名利の要をもとむ　發端
の句に應映せり
名利をもとむるの要此一字
術文也荘子盗跖篇小與名
就名也云て下の句に非以
要名誉也とあり要の字は
假名つきるを合て据り
来きろ之

ておもまことの智ちあらずいくなお
ふをとり智といふへき可不可なき一
條やいかるをとり善をまことの
人ハ智もなく法もなく切もなく
名もなし。雑くなりされつさへん。
得徳をかくし悪をましろうハあら
こがたより賢愚得失のさうひろ
そうされなき海のひのんなもち

てぶ利の事をとりもつにくれとしぶ事を
旨ねあてぶのようにくれとしぶねうようす
法然上人　源空也姓漆間氏　美作國稲岡人也
をうされてぶ利ををこりかるまぶいうしてこれをうり
をやめ給んとやうさはぶ目はをめうんかと念仏し
給へとこうへられうきるぶいとたとりをりぶ法
ハ一定とおもへん一定ぶ不定とおへん不定というれうし
らしもたうぶまうぶひあうも念仏すれハ往生

ひともいそれうりぶもしたうとし
いひうりををもこうも　源氏　目情國ぶ伊ぶ人とうやうぶれ
来屋ようとはんうるようひ
うりをうをのこうひて　昊ぶうの栗
のむをめかうちうをきて人の
とあうハ非べ京六条町ぶ老
戸あり常ぶ大豆を食べ夜
ま米をくぶ人の西へゆけ
て豆腐を京ぶてくうせをり
人うぶ豆婆とそ云をうう又
伊豆國ニ湯ぶ或人のむをめ
ありぶ殻をうすうく菓を
のこうひをううこをを或
人ぶ嫁しをうとうん
栗をのこうひて　昊ぶうの栗
とあうハ非べ京六条町ぶ老
戸あり常ぶ大豆を食べ夜
ま米をくぶ人の西へゆけ
て豆腐を京ぶてくうせをり
人うぶ豆婆とそ云をうう又
伊豆國ニ湯ぶ或人のむをめ
ありぶ殻をうすうく菓を
のこうひをううこをを或
人ぶ嫁しをうとうん

くく馬　競馬と文也

世はなきもの　源氏帚木まちれ　五月五日かゝ義はくく馬をえん侍

らの〳〵拙作をぜん　花ゑるま　ゑ〻よ車は前よ雑人をへくて。

ちれものをとハされものを　えゝさりしうそ　ゑるそらちれ

いろ〳〵　万葉世間之愚　人之吾妹兒爾あろ〻ぬ恋〻

きハよるまれとゝとに人おりくたちこそ〻入ぬへ

きやうもかゝるおるまよむひろあみちのまよ

法師のけりてあれまこついのく拙くありとゝ

つきあるいこう眠ておちぬへき時よ月をさます事

ゝ〻ふりにとゝろ人あきぎりあきみて世はなきもの

くふかくあやうきなれうへまてやにきんあるまてねある

らんといよ〻我かまあとせひ〻まくにとまくゝ生

死のおまに兵今まものやあんそれとらて拙くそ

見城くひをろあ事ハふとまさりくる拙をと

いひられおある人とも波にさまくゝ久れむをろう

よいとひて〻ゝるしろをんくりてくへて世弘

へとて面をまるまてよひへ行りまにかゝのとうり。

人木石まあらねれ　遊仙窟　波久ハ　ありひのくにんなれる。

日心非木石豈忘深恩ヲ

白氏文集曰人非木石皆有
情不知不識頑嚚無感
物況夫朝夕相與
共處日月已久
久而不覺
唐橘　村上源氏久我の庶流
教相　真言宗不淫清聖教を
学ぶを教相と云
ふを事相とす
氣のあらく　源氏物語に
けのはかアぬるまや
うちおかひきれん　眉額
くれて目のうへ

ぶるふ　ひろきねんちゃ
むひあるりきるるやへ
あるねんはよりて
ろ事かきるあるに
唐橘中将とて人のこに
侍ふて　薇桐の人は
けの氣あるあるて年
やくたるにぞかはやう

二の歯ぬけて　人の歯
乃西く反赤くしておろ
しき西く安摩とそれ
き歯ありて次に歯を
の歯と云
鬼乃ぬけるあるて　剪燈新話
話のせう馮大異の鬼
かへて鬼のうちにあり
てくるれ人里人も
なきて近つかさること
おそひ合せ侍る

でいきも出かたりきれて
かつろひくれとうつく
あるて同眉額みとも
てげおりひくれて
歯ぬけおりてのやうに
たくおそろしく鬼ぬけなりて
月ハくてきぬくるつきの
侍ハ坊ぬけちぬへるて

あるて花ちりくあるて志まくろりぐるやまひ
もあり事よくあるとくろき
えんあり　艶なるこゝろをやを　はなれ書つくるぐれとやくにえんふ
よめり春風艶陽の景れ花ゝ　ふそにぐやしくねゑのおく
花ゝすくろくき花　有花便　ふくぐまくろ初あるて遠こたり
入門主人莫問誰
白氏文集遣見人家花便人　不論貴賤与親疎
ふりまくる花ゝすくろあをさいはるそれん南
面れくしこれあるてきれをあるにぐよむき
てつくるものよ紀ゝとあきたるみをれやれふり

ゝきんぐるらきよげあるねとこれ年女をるとるて
くるとをくれとぐよくるくれとやるるちゝして机ぬくん
かゝをくるゑるをくるえぬくるぐいくあるくんあるきん。
くるひきくゝりり
にやくくあるくるくき志ゝ　あやれ竹のあこゝ乃くるくるり。
指衣よこきさーぬき　濃紫系
濃紅の女あり装束よさ　いとゝ紀異ゝ月新ぐあひ
ーぬきハ紫色ゝ
ゆくつきくる　似合くる義ゝ　くるくるねとにやくくなる狩衣
くくやくあるかくやくかちい
くきゝ源氏帚木よ　ぐこきさーぬきゝとゆくつきる
くふてやくくり

河海ヨ　細ク許　少ク

いかゝの家よりからて
そやちハめてく古今よ
ひくゝなる乃宗よりそりて
うゝひすこのこ者ひうくゝん
之ゆゝす　之もいくまゝと——中のかゝこちを編笠れ海う
ろき家こ
わきすきむ　ますこにすき
これ影こ又ゆやむ義もあり
又すこひよ也すゝとたゆむ
よの表家あり

榻　和名集榻之知床也車をす
らてをくこのくてゝろきの
やうあゝこのこ
女房のをひくせよゝいあと
よゝい用云と也をひ風ゝ

あこうんまてぱやうなゝ五ハ
ゑゝりをなしてぱゝうあ四れ
いおこ
ぱ編笠れ海う
いこ
ぱ簾をえゝす
あこ
ゆれ
ゆゝきこひゝろ義ときてゝろへき
人もあゝとゝよゝぱゆゝんゝる
ゝまゝりくてぱんをゝりぱ
ゆきハ簾をゆきやゝて山ん

たきゝの白ひこ　源氏東屋
ようゝてひこゝをくゝるをひゝ
せゝとくゝハあゝまて赤の星
人もおゝとろきぬへ——

きゝに趣門のあゝちよへゝ
榻よゝそゝろ車れんゆゝもゝ

ゝ月とまゝ心ちしてぱゝ人のゝ家れおて
——ますれすてぱ仏事あゝとゝゝ梅のやゝとゝれ雲れゝ
よ法師ともまゝりゝ殿宅の風よゝさゝゝれゝる雲
たき地の匂ひもゝみ沙ひちす寝殿ゝりれ雲の廊よ
毎ふ女房の遣風ようゝあゝと人めあき山里ともいゝん
心ゝひゝゝゝ笑まゝよゝゝれゝ秋の町ゝぱゝれあまゝ

虫の毒くことくまし〳〵
加言とかり源氏幻巻よ
つまくと我ゆきくすると見と
くとくまし〳〵きむ〳〵のあるを
又はなをふかまくかこりん又かと
つけの義ゆるそて久
ゆへ〳〵

五世　閑院の未流等一流の
家く
せうと　兄と又兄弟姉妹を
も云背夫ともくなり

人ありきるとゆ坊ぬくこ
人核のまれ僧正とこ

ゆきて。
ゆきくもやき
とゆえて。ぱきいめて腹あり記
核のまれあり。

枝末流きるれよりを枝の有名れぬきりらけ
の僧正とひひりりぬよりくそこちてきりらけを
りりきてこりきれてこそ記あるきあり塚まてあけ
辻と塚沈僧正とこいひけり
柳糸妙色よ強盗法師と号ける僧有りり度
強盗よあひこりゆへよ山ゆをつきよりこと
こふひこり附　万葉よ
海ゆこふ月とあこれまねけ
こあひむもくいまあんくも
古今ホ
成人清えへまりきこよ老こ家
戸のゆきつまこりきこ

毛詩 北風終風篇寢言不寐
願言則嚏 註曰我甚憂悼而
不能寐汝思我心如是我則嚏今俗人嚏云人道我此古之遺語也 瑣碎録曰
白墳嚏子曰酒食卯日犬吉辰日婚合午日喜事酉日客至戌日嫌惡亥日君子
思餘皆凶漢青藜文志 嚏
耳鳴也 雜白十六卷師古
曰嚏音丁計反 李濟翁資
暇集今人每嚏必自祝所祈
云云案邶終風篇註願猶思
也言猶我也蓋他人思我
則嚏之也鄭又稱古遺語每
嚏云人道我以為他人說我
則嚏此正得其願言者非
呪願之願非言語之言今則
自祝乃由誤解詩句耳
容齋隨筆第四曰今人噴嚏
不止者必噀唾祝曰有人說
我婦人尤甚云云嚏音帝鼻
氣
日本記第一定
其禁厭之法
光親卿 東鑑二十五兼文三
年七月十二日 按察卿光親
太日出家
法名西親者為武田五郎信
光之頼下向而鎌倉使相逢
于駿河國車返遣依觸可誅
之由於加古坂翁首記時年
四十六云云
御車とも銚重と

まうけアヒヨりこのやうなる
形姿之
やんとのきこと　こそそそ
かめこう　詞之

やあられまれ　者　ゆうたう
とありと　遊　感せちを　活ろと
老来アてはめてみちを

朱文公勸学文勿謂今日不
学而有来日勿謂今年不学
而有来年日月逝矣歳不我
延嗚呼老矣是誰之愆

ふうき塚　李卓吾浄土決日
古人句曰莫待老来方学道
古墳壽是安年人　待老来

老来アて　嶮　道　汚せん
まつとあられふうき　塚　おそくも
こまか年　人　やたうさうり
病をうきてたちまち死ぬ

始莫学道古墳多是少年人
すきぬるものあやまれる
荘子蘧伯玉行年六十而知
五十九年之非淵明帰去来
辭学今是而昨非

さんとする時まうけはじめてを
ぬるうれあやまれることをしる
あきあやまりとふ老化のことに
あらん　遂　ますへ　お事　ゆうくす
きてぷみ　ものうやし　きやを　時
やんやきて　ものうひあん
ちくのまも　新古今よ
友野ゆきうのつのつくもも
ふれもうとふいもくうろ浅
八七七　拾よつのまいさとて

ク　きてつれまも　ヨすうまき
やさうえあとうけせはうり

まうてつぬるなといふ
附の君也小原の角は東の
弓ハ原の彩く角を生る附
一卒ちりはうきをを云
衣月まつのを生まろ殆り
芝野ゆくとよめり
禅林の十因　禅林ハ寺の名也
東山求観堂あり其求観律
所の作ゆく僧生十因一巻
あり一廣大善根故二衆罪
消滅故三宿縁深厚故四光
明摂取故五聖衆護持故六
極楽他生故七三業相應故
八三昧発得故九法身同躰
故十隨願本願故
心戒　或曰心海欲彩後擢九

もうけく仏道をつとむる心海
めゝあるこさん昔ありをる聖
さ人来りて自化の腰事成
いふ時義ていく今史義乃
事あるて改は能々せまれ
ひとて耳をやきて会仏
でゝあるは注生成ときゝりと
禅林の十因は作り心戒とい

月心海上人一会不生をよ
めり
茅屋数年むとねさきれたる人ハ
あまをなり涙をきくりめきん
同十八は心海上人
いのちをハいのあり人のおもん
うきまいけるかこうつゝけ生
あり人のをく心海上人ハ墓浦寺
の正法國師のオありとき之
應長　花園院の年号之
ぬてのかりさり　つれてのか
ゝさるあり以の事をも將
の事をもと之　仏弟地位は
ぬていきくりとあり

きるを聖をさあまをよ世の
りそめあるとをひてをうに
ついをきるとをあくづはい
うすくまるとくのこゝろまて
けるを
禅長の比伊勢國にり女院
にありくるをねてのかりくりとを
とあるてそのは世はえり日

とて。京白川の人鬼足にてゐまとぶぬるハ西園寺に
まゐりしぬきふハ院へまゐるべし。今ハそこくう
をといひあつぬまさくく足うといふ人もあくそこく
いふ人もあり。ぬとこ居のこのこいひやまぬそ
ぬ東山ゐる。安居院(あくね)色へまゐり作り。ぬ条ゐる
うこさ海ぬ人(ゐる)ゐ。ぬ様さて。一条室町ゐ鬼
ありとのくしてあつり。今出川のをとりより足や其ハ院
院の住持　一條大路の色　ぬ住持(ジュウジ)
ゐありつるゐ賀茂祭を市

見物の用意の住持ぬ
こくくハ八ゐ扶ぬそこ
ゐとくるゐや

へうもあくぬこくくゐ。そやく記
ゐぬくとゐあくさめりとて。べを
やあてんゐるゐ。おなくあるこの子。ゐくまてかく
こさこきて。ぬハ厨(クリヤ)ゐこるて。渋(しき)まーきこるゐこも
ありきりぬぬを。あへて三三月人のゐくゐ事作し
をうゐかの鬼ぬ。ぬこゐこのゐくーをこめをや
くりぬとゐ人も作るゐ

亀山殿　亀山院渓涼の亀山
の麓ゐ山荘とこて山隠居

亀山

まかせられんとて大井の土民に
仰て水車をつくらせられけり。
おほくのあしを給て数日にい
となみいだしてかけたりけるに。
おほかためぐらざりければとかくなをし
けれどもつゐにまはらでいたづらに
たてりけり。さて宇治の里
人をめしてこしらへさせられけれ

あたりなる亀山殿とも
水をまかせ 西行か哥に
ますらをがあら田に水をまかせつゝ
うゑしかほどのさなへなりけれ
家隆卿哥に
春の田にまかせし水も岩こえて
あまたせきやるさなへのころ
水車 東坡集十三無錫道中
賦水車詩 翻翻聯聯銜尾
鵶 犖犖確確蛻骨蛇 分疇翠
浪走雲陣 刺水綠鍼抽稻芽
註曰、江浙間人目水車為竜骨車
水車の事は田へ水をかけて日でりをふせぐため也
是を造式とも図ともあり
王氏が農書に詳也

はやすらかにゆひてまゐらせたりけるがおもふやうにめぐり
て水をくみいるゝ事めでたかりけり。よろづにその道を
しれるものはやんごとなきもの也

五十二
仁和寺にある法師年よるまで。
石清水をおがまざりければ。心
うくおぼえてある時思ひたちて

仁和寺 寛平法皇の御庵室
あるによりて御室とも申也
石清水 貞観年中に和州大
安寺の僧行教筑紫宇佐八
幡にまうでし時大菩薩夢にみえて汝王城に近くへし我もともに行て天子
を守らんとのたまふ行教夢さめて奇異のおもひをなし都にのぼりし時山崎
にいたりて又夢に我住所をこゝにさだむべしとみえて東南男山鳩嶺に大
あるを行教則奏聞して勅使をたてられ宮作りて此所に勧請あらせ
給ふ神皇正統記公事根源元亨
釈書などにくはし

からうす　徒歩より

極楽寺　八幡宮護國寺別當

安宗開山也縁起云大安寺

傳燈大師位安宗謹言伽藍

壹院号曰極楽寺在山城国文世郡料

手上里　右件寺奉為名清水八幡

大菩薩三所君達梵天帝

釋天神地祇兼師僧父母六

親眷屬三有法界有識無識

皆悉為令往生極楽浄土以

去元慶元年始所建立也云云

安宗者行教和尚

之弟子紀氏

高良　武内宿禰也日本紀

天武二年二月八日

高良託宣誉田天皇御宇為

農日武内之健將又公卿補

任日武内神大臣孝元天皇

五世孫也在官二百四十四

年春秋二百九十五年但薨

年月日人不知之或曰仁德

天皇五十五年丁卯薨

或説かくのごとく玉葉命也

かくのごとくなり

是も仁和寺の法師の酒のあんとすることく。

あるふしと有けり。酔て興に入あまりてこゝろあ

ありあるへとて歌よりつきさ

きをつまるやうにとりて鼻をを

知名集説文曰三足兩耳和

五味實器也

世俗よりまるもの形

拾遺1

はかなくよのなかをうらつろ四
あうあへるもえこそうとも
かなそく　巻の字をよみ歌
辛苦をうる也

しをしめてかをとさしいれて辛
出くるよ満座興よいつまかきう
あ。志ひてえて後ぬんとすう
あ。大方ぬれて酒宴ことさめて。いくハせんとまとひき
あ。とくくをれて。ひけまいりきて。與ちう。て腫よ
くをみちて。いきもてはまきれ。うちとんとすきと。
たやしくをれて。えひきてくこかりられ。かふてす
へきやうふかて。こあ。あうはのくうへよう。こうきち

くもて。ゆ。ゆ。ゆ

やらんとも おぼすべからずとにぞ
耳をふさぎきゝ給ふとも。命のうちふきさんざか
とゝ〳〵引のべて。ぢ紙をまりにさゝ入てかゞと
俗てくひもきりうりをきたるよ。耳鼻をけづり
らぬをにぐるぐる紙命まうをぞ。ぐさくやくわうきり
御宮(ぢう)よりうき呪(ちこ)のありきをぞいてさをひ出しく。
あうんとたくむ法師とあるとて。紙あるあをひ法師
ともゝをひて風流(ふりう)の破子(やうこ)の紙(ぬんろ)会(ぐわい)ないと

風流のりうこやうのりの
梅アゝと淡ヘーやさ〳〵きば
也破籠(はこ)ともはこゝもり
飲食を入る具あり
和名曰樏子(カレヒケ)今俗呼謂破子
是也以餉送人也
なゝひの男 仁和寺(にんわじ)よりあり
そのゝ〳〵 唆(サ)のまた也
ちをそゝめ〳〵いそよりうきく。ひてこかつこ
あうひめゝりて。ぬつる芸(こみ)のもゝろよふこのぞいさゝを
いゝゝゝゝゝゝゝゝれ
いゝゝゝゝ甚ゝも傷ゝも痛と
も萬象(まもり)
源氏須磨(すま)よりゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ人もふ。験(こゝ)あん侍ゝゝ(ぬう)

まきれて。花をまつ人ハ
困のまゝあゝへ〜とさゝひれ　つまんで〜れよゝいひしろひく。
そゝ〜ろと云ふ〜
紅葉枝たん　白氏文集林〜ら〜はるまれをとゝむさて。教
間煖酒燒紅葉石上題詩拂　珠をーすると。ゆ下とく〜ーく
緑苔
いひもろひて　五色よりも美せ　むとゝむ出ふ〜ーていふくゝ
り〜ふくゝまひて　とくし
くゝまひろゝ
山をあされ〜も　求也求食ハ　まひて。ゆ美をとくきのを〜ゝきと。
多ゝの食をとゝむゝせ　ちやく地もゝ〜れ。ゆれそうひ
定家ゝ
ゝ〜ハ〜ゝ足ゝ見ぬまもゝゝ　ゝゝまゝとて。ゝゝぬゝもゝくゝを
さゝ〜ひあゝゝゝめ〜ゝゝ　ゝゝまゝとゝゝのゝゝとゝを〜ゝのゝんとゝきて。
あされともぷゝりきゝ

ゆゝまゝりゝゝまゝ。ぬゝとゝゝゝゝゝりきゝ。法師せ
ゝとのゝとゝゝてゝきゝよゝてゝいゝさゝひゝゝ〜ゝゝとゝてゝゝりよ
きゝ。ゝゝまゝゝよゝ眞ゝゝゝんゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝいゝふゝきゝゝれゝゝ　楊誠齋家乃生涯やゝ〜ゝ家ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ひろまぶやアヒハ茨の弓るよりもあり。天井のたゝ紀之。

造作ハ用あきを紙

莊子曰知無用而始可與言之矣地非不廣且大也人之所用容足耳然則廁足而墊之致黄泉人尚有用乎惠子曰無用莊子曰然則無用之為用亦明矣

ちゝ

くへくてアて逢たる人ハ武方にありたる事。物ゝ沙汰

あぐかりつくるとあいかれべてるくあれあるる人も紀

へてアろいなつくゝくゝぬ

ぬくぱつきさるれ人ぱうゝさ海ホ

あゝくゝさ海　暫の字をよめり

又白地ともかゝくゝめ　豆出くもぎうありつゝまとて

の義と

いきもつきあへす　二條院讃岐

いきもつきあへぬ　いきもつきあへぬ　ぬ　ぬ　ぬ

の哥ゝ

ゝゝ海ハ流ゝかきゝ日ゝかつく海ま　ゝよ紀人の地ゝゝすゝ人あ

いきもつきあへぬ沙汰をゝゝりへ　まゝあれと紀ゝりよむきてゝを。

よくゝぬ人ハ流ゝるゝ　ゝく

文ハ曲礼の儷言すゝとゝ　をのつゝ人もきくにゝゝあれよ

れ勢説ゝゝとゝゝ重同　すゝ事ゝれといつゝところ　ゝぬ人ハ流ゝもゝくあまゝれ中

をゝゝてゝゝ

らゝかゝき　乱ゝゝきと　にゝち出てゝゝ事のやゝにゝゝ

源氏ゝゝゝらゝくゝきゝ大

流ゝゝゝてとあり　アふせはゝみゝおゝくゝアゝひ

のくしぶいとらうくしぶおくしき事をいひてもいとくきうせねと。きうるれことをいひてもよくヒろみまろ。ふのかとハくれぬへきぶくのみ高れはあり。さえあろ人ハそれとるくさこめあくるよとれろ分よむきくきていひ出たるいとまむくく

東七

人乃くくりいてたるこの畑くりれこの日ろきこ

はぶかいおくれぶくくく

観經ハ日心如流水念々生滅於前後世不離住故心如
太風一刹那間歴方取故心如猿猴遊五欲樹故心如飛
蛾愛燈色故心如野鹿貪假聲故心隨萬境轉所實能
幽

よまう きこうく

心はなんてもかいてもけ。嵐をせくよりあくてハ
あらせぬとさあれどのつゝ世をむさるよりゝ
事もだよるとよあれどハあとゝあるんぞれをとて
そむけうひあ。さりあるべ。ぶりハすてしあと

いそんハ。ぶ下ぶりあり。ぶれた一ぶみちを入てぶをと
ゝそんんたゝひぶあるゝ。ぶきかひゝゝの。貪欲おり

貪欲おゝき　法花經諸苦故
目貪欲為本若滅貪欲無所
依此

きよにゝへゝゝれ。紙の衾衣あさ
の衣。一弾ぶまきあゝさぶあつ

戒の衾

一弾のまゝ　事文類聚前集僧問守清禅師如何是和尚家風曰一餅熟一鉢到所是天涯

ぶいくゝゝくゝ人のつゝいへとゝふさん。
ゝゝむゝ不ハやゝとく。ぶゝやゝく

ありさのあゝゝ　范堯夫布一衾錦蓁蓁之甘緣布之温名教之樂德義之尊
六韜鹿裘盗跖袞布衣掩形襦

たゝぬへし形よゝゝ不ゝあれハ。
さハいへと無ゝまゝとく苦よゝて

ちゑくことはこうおかきぺんと出れ
りけきぺんとよりさやう事をつとめてがくいよおもむう
さんぼうつれくほいはかうふあるまいくや
大事をおりひいくん　法花經　方便品世尊唯以一大事因緣故出現於世
心よからんことはがいとをきすし
てさぶうすうへきぬきりしまりてくおのれ事
さいとときてぞうくれとぺんぺ衆やあんぺ衆子

くこうくめよきて年ろうもあれハこうあれそうとと
まうんりとあしぺおさハうしかりぬやうにかとせいんよハえ
さうぬとれいとしかさあうそてこのつうかきりまく
ぺひとにもあうくれぺおりやうくんをうるぺにうんあう
きうてぺるしあうぺうそうぺ一ぢハにくめうぺうおかとと
水火のせむうるとも　孟子　豈有他哉避水火也如水益深如火益熱
老ううおやいときるきう
花山院年十九よりせ給ふ時
悲花經妻子珍寶及王位臨命終時隨逐於我唯有善法不隨

命終時不隨者とあるを思
須して行ふ位をのれ
出家云ものしあり

食八人をまつ畑ぶ寄れきたり
とぶぶ次のせむろうも生みれ
れて記畑をぶ時むろう訳
いときふきぶ。去れ悪人の懐抱
くくとて抜さうんや

真宗院　仁和寺よあり　六十
いもうら　芋頭くも芋魁と
もくきり

真宗院ぶ感歎信抜とぶぶん
とふれ智去あり多ぶもから
おくくひくり。後義れ強まて

も。おれ抜あう抜にうつくくうそぶむさりとよを記
清。ひあくく文をもよみきりぶうら事あうう。
七日二七日あと。療治(りょうじ)とてこうわぶやうにぶ記
芋くうらをえくひて。おく食ぶろつの病をいや
しきりぶ人にうにうう事はぶく記りれくうひ
きうぶきハめてまつしかりけうぶ帰(ふしき)去ぶさとよ。後
二百貫と坊記うをゆうりきうを坊を百貫ばり
あり　後を料金とえんや　てかれ二万疋ぶ。かられあ

とにちさめて京あつ人なあつきをきて十要つくりてせ
て芋がらをとりうしめきろかとよみて用にたち
ゆうことあくてそあしみあるは成にくり。三百要の畑を。
まつしきみにまよきてかくちくひきろ。成しかゆ
くくれ道ふあるとくへよきろ。仏教ぬつ法師を
力て。ちろくりはとしよをつきくりきりしへ行畑
とへ行畑　ちろくりはとしと
行畑くしと云ふ
ちくしあくまへ。仏教ぬなは僧そんとくいひけり。

仏教教えめよくらくつよくだ食まて。雑書学生弁説
法灯　仏法を灯よくしふ
仏灯傳灯ふといつもひ義
人よしられく。家の法燈あれ。寺
中まもおくふくれうきれとふ。世をかるくやひくらを
ものそよろつ自宅ふてだくくへよくくふとふ
去ゆく
とあ。出仕して饗膳ふとつくはもられ人乃
おすへまくくれまくくへ。ヒくふ前ふすへねきそやて
ひとりくらくひて。ゆりくきれはふりはいくらそゆ
とき非時　仏家の法ふ一食ふ
て日中ををてハ他とくくす
きくり。ときは時も人ふ行くく

或一人の後孫なる二人の裔
飯よりとくきれハ伝ゆゑして空てくるす。わらひさき時。
吸ふくりひ見を非時くすて　栗ふくるも。咲ん。ふてねさ
分律より見えたり

きれて畫もりけこりていくあるとき事あれる。人の云
事きいれと。見さめあぬきハ。ぐ栗もいねとんとす所
してくるふきありきあ。よてひあるねさんあれと。
人はをれをぐろつゆるされ。りり海のいれ
見きろ見や

れ産の時こきおくす事
平家物語第三云后れ産の時　沙産の時こきおくすき

胞の時のこきおくす事

胞殿の時のこきおくす事
あり皇子れ誕生ふハ南〈蕃〉はさまれろ事あるすれ胞衣
皇女誕生ふハ北〈蕃〉とこりろ時のまーあひやこて
北　蕃
おくすーこりきれハ急きれ止
蕃ーるをーこりきれ共行而
きれるまこ人ときろ　これらせ法ひたはすあ下
胞　和名集曰蒋魴切韻曰
胞音與勝同和名古之岐　さ海ありおこりてさせろ中法か
胞衣　神代巻及至産時先
以淡路洲為胞とあり胞衣
とをすとよりのられるの
しとあり
すふりぶろき寝花の絵よい
ちろき寝花の法よ　儒書仏書図一
法日本の記録歌書等よおきく
す種られ寝花とおさしろと寝
花と字法の寝花蓮華王院の
やーきんのようみさろ西り。
こーきたとーさろ法ときこり

寛元東大寺供養のとき数之

延政門院　後嵯峨院の皇女

こゝろもとゝ　いとしのつれゝ

ゆくすゑ　くゆうこゝ

かゝつるひのこゝろ　かく

とゝはけはゝ　ひくいまゝ

をこゝろれさるやたとい決定

ありとても　知あの姫宮よま

せのふとゝ　あはすこゝもく

ゝ　ゝゝ　明魏法師はす

てゝ　ゝゝ　ゝゝ　ゝゝ

いゐをれにゐの数みゐむゝ

ゝ　ゝゝ　ゝゝ

延政門院いとき　かくおりゝ

しけゝ時院へまいゝ人よれこと

つてとて　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

ゝ

うゑつけぬところ也

車の五緒　五法の事有識の
くくろくきれくくさくハ
あれもくくに知ること云
ア大臣ふくのかハ用られ
まきやうよあり

車れ五緒ハ必人よりすぐ
とふつきてきいむつつさ位
かいくるとぬれハのくものやと
くあくる人おかせられし

冠編　冠箱也まけものよ業
とへて漆ありよーふー地
まき絵ふくをーて拾けくら
ぬかきうてくる

冠ハ昔よりハくろ
よたくぬくくあり古代

冠中の関白　寛平之也大織
冠二十四代の孫近衛殿の
一流也

付る枝のす
栄ゑ七尺五寸普通乃柏木
くりハ葉せくくぶくしてう
らたをそよ毛ひくり是を
ゑ付る栄と云也　一説ゑ云
たくん栄とくりの之年の内ゑ
立枝をゑくくく

て付り春を唯を麦殺もろ
ゆへせ付や〻口傳あり或ハ
栄を用と〻へとも春ハ梅秋
お蓼よ付ること常の義せ
大臣大饗の時是を用ゆ又
初春の鶴雉を人よつ〻付時
の作法せ又春野より人れと
へつ〻付すハ三位又の栄の枝を
刀めをつをもてををねと
らうて付うせ一双を付うや
うたーうふ知人ふ一 秦兼
則説又ハ家大納言隆親卿
の説よ栄の〻を六七尺唯
雄一双を付うせ又大臣大
饗元服綾袴祝賀の時用之
産取へをうハ根ぶきけふれ

つたうう事も枝初作をを
とゆきれを腮部に引ら毫。
人をふとを也ていを武縁り
さうハをのをうをふんやうよ
つきて風いうせよを作られうり
うれを。ぬもあき梅のををよ
ぬとうをつきてよいうせうり。武
縁うゆ作ハ。栄れを。梅の枝。

ふ付せ義民朋代説曾野よ
ア人のをを人雄をけううる
栄ふ〻ねれ荻蒔ををを〻ふ
て伝ふをも付うを一説ふハ松
姫を付うをあり山姫を義
家の物ロハ正付之鶴をハ
荻蒔の枝よ付小ふをを
義の枝よ付うり雀をハ行の
えをを付うせ十月ふハふ〻
栄よ付とうりハ曾河氏久
う説せ垂見河海抄
下毛野武勝 漢日本紀ふと
ふハ下野國をも下毛野國
と書ア変うてを氏と尺
えうり
返ーり 木行よう〻を

つをを〻ぬうをを。
ふ栄ふとをもたく。をを〻ふ
さ七尺或ハ六尺逆ーカふ
よきを。枝の事に鳥をたく。
つうをををますを枝ありを。
ら荻ねををぬをを二本付へ。
勝ぬれハ。ぬうち相のたき
にををへてきりて半ハ角を

きりよきやてこうう成
こうりそくを迄一刀と云
雪よあと成
初雪よ我とんわとをつきしそ
そんあさくこぬ人を待うれ
あすはあかひの毛
花よもつきもとゝそ　そしり
いと吳竹よあ一かゝこよ民勝
う花よもつくろそんもしすと
えよ射してえ也
伊勢物語　むかしあやきあかい
あくらきことときこゆかハ
一きつくうまつかとこも
月ゆうよ梅のつうえさよ雑
をつきてたそまつうと
ゆれむ恋ためのしあう花さ

やうたいむへ。初雪ふれた
枝をかこにけて。中門よりつう
まひてまいつ。大みきりの石成
つくひて雪よ迄をつきすあさた
かひのを成。さこうるとうちう
して。ひひれたれる掬にのを
かく。録を出さるれて肩にをて。
稀てきうてく初雪といへと。

とゝこーもとうぬ物よう角きう
とゝみてこてかうりけまハ
いとうーこくあしうう絞ひてつ
くひよ涙ゆうう多

雪ハ。稽るハなのハこ。ぞう
しなうへ一とや記。
ありうん。花月ゆうう
うあよ。梅の作り枝よ雑をつきて。
うあよとあうむハぱ。もとうねといへうこ。伊勢物語よ
んこうう。つう花ハ
出なハ業平也　稽や　之文方

常れうよ乃。かこれぬ。れの。雪よ
まいうすぱ。あ乃ハ。おうひれ毛をちこれ
ぞう雪ゆれそれ稽れうう。よ
しなうへ一とや記。花よもつきすとハ。いうゆう枝よ
ありうん。月ゆうう。梅の作り枝よ雑をつきて。
うあよとあうむハぱ。もとうねといへうこ。伊勢物語よ
んこうう。つう花ハ
出なハ業平也　稽や　之文方

葉平　三品弾正阿保親王第
五男也故景在五中將　忠
平ー師尹ー定時ー實方十
一月十三日於任國卒歟系
実方ハ中將まて成ー人也禁
中にて打成源とあらそひわ
つらく冠を打落しうゝ谷
ようりて狩枕をつくとあるを
く奥列へつゝハるゝ列彼地ホ
て卒ゝ

吉水和尚　法性寺関白忠通
公子也諡慈鎮吉水今九山也
月とをて　をてハ愛もろ義

のやさしき人ハ世にまれ

世人の考よいひまゝ伝世ハ。一年
ありしもよ。むかし文目ばかり
をぞひとめて弱ゝよ。実方ハ
みちとよ。氣のうりきゝ不ゝ伝
世ハ。ほやかなのをきれと
おもえ伝ゝ。吉水の和尚
月をあてむとをあいしへ
よありゝぞよみ伝きゝハ。ぞれ

ぞしゝとゝ子ぞあるをを伝世とをのきてゝよりハ。
をのくれ知をもゝうきゝゝ先といとう
やうやゝくいひゝうゝいゝくおゝ伝
今出河院近衛　今出河院ゝ
亀山院ゝ后常盛井相國実
氏公の孫中文嬉子也即西
園寺公相公の孫女也

今出川院を湧とて集と
りあゝ入ゝ人ハとゝ世
きゝ時。ゝ百首の歌をよゝて。かのゝゝの拡
乃ぞ前世をゝて。書てを向られゝり。後よやん
ゝとゝ伝ゝまれあゝて。人のにゝあゝゝおゝり。

作文始序をとゝのへ

押領使　東鑑七日鎮守府将軍兼陸奥守従五位上藤原朝臣秀衡法師出羽押領使基衡男　同九日秀衡文治三年十月継父遺跡為出羽陸奥押領使管領六郡

土おかね　土大根也和名曰爾雅集注曰菖音福和名抄保秋俗用大根二字

いとやうあるものゝきこゆ。古おかねをよろつよいうき茶

そ。終にとたかうはやきて

金銀のうちにもあらぬ物

きこうそかうみせめろよ銀の用よ兵二人出きて

金銀おしまれ戦ひて皆退返してくろう。いせ

不思議よおかねそろあてよ地し行ふ世ぞ思

人ろ乃ぞくひしまハパうろ人うとひくれ

ぞ。まろたのうそあさみくめつろ土おかね

らふきふゝぬといひてうせよろうふく伝をい

たしぬきんかう涙もあるきろよう

書写の上人　性空平安城人　従四位上橘春根子也

六根浄　眼耳鼻舌身意を六根と寸

書写乃上人八法華懺悔の功

つもりて六根浄よろへ乃人

大豆のゝ[illegible]をたきて　世説曰魏文帝嘗召東阿王曹植七歩作詩不成者當行太法應聲為詩曰煮豆持作羹漉豉以為汁其在釜下然豆在釜中泣本自同根生相煎何太急帝深有慙色曹植字子建魏曹操子文帝第也

ありとり。[illegible]ゝ[illegible]。[illegible]。[illegible]。

なよあつけくり
古事談曰牧馬與玄上一雙名物也時人不辨勝劣爰有信義兼雅三信明博雅三兩位息人不知勝劣初信義彈玄上信明彈牧馬更无甲乙信明彈玄上信義彈牧馬其聲雲泥故時人皆云信明超信義玄上勝牧馬云云

ひとつあちよりぬけて
ろよそくいぬをちくまひ
くふよてつきくれよきれそ
秋信のよいふなとよくそ
てとゆへなうときかぶいう
なるいえ紀ゆ有きん掃見
きるふきぬうふのよるて
くあちてとのやうとよ

荀亭のかく　衣大臣兼季
ちくをさくれそもち　柱の字也
こくちとよのり琵琶うてくり
とのの琵琶のちうはとくり
ありありめくり法師の琵琶
の柱はあり　衣彼とかくこと女
きぬくつき

の字也

紀をとゝまるかと秋
ふ紙ゆくるとやうて面新をきくくらて。ぬちすう紙。
ろ時ふ文かひてもひつうまけ切さう人くうみきれ。
前ねくうりときてもぬ法の人乃家ぬこれとにてう。
ありきんとおうく。人も今ろ人の中ぬひよそへくて
そ。誰もかくおうゆうるや。又いうまうろ。と人のいふ
しとも。月よ人ゆう物も。我ら心ぬちもぬふふと紙い
つそや。あるまーりとおうて。ぬつとハをひいてねもも。

まさしくあり。心ばせ。ろ。はれんろうかくおとゝまや
いやしけるろ者。おくろあるろよ。個人のおかき。祝よ
業れおかき。持仏堂よ佛のおかき。前栽よ石ま木
お栽よ石ま木のおかき　のおかき。家れちにて孫れおか
座よ竿樹怪石どあつ先て　き。人よあひて何乃おかきれ
あくむろ八無あれもあまり
よおかきをきふろくし
文車　びくるまハ今禁中よあ
ア又東寺よりあり失火不
とのはそやくり出さん為
の用あり
ろうつく　塵をすろ更

文よ化長おかく書のきたろ
おかくそんろうからぬハ文車れ
文塵塚のちゝ

あいるき　無愛河海無間深淵
類聚　源氏桐壺よあいるう
目をそそめてくまり

世よかくりつくろうと。波ハあいか
さるやおかくハられ屈云あり。

あろうもるて。八拍をいひるすよ。ますて年月すきぬい
もへてアれれぬひきまにくりるく。業にもかきて
めねきはやうてちくまりねみちくの物れよてよれいしし
かくるる　頑の字也

きまるとかくるくるる人れそた
ちうねぞくろよ祈れとくよいへとも。道をれる人々。
さうよ伝も。あこさすぬ。るよきくとんろ時とハ何学

もうろくものなりけり。かの川あるくさまもうろくしたるなり。
まうせていひたるこそやうてうきたる事と申ゆゑ
うきうつること　浮言　浮河
とも申さるべきこと
鼻のかしらおとめきて　源氏帚
木まゝあのまうりおとめきて
くうりあるとあるきをねん
しうるべき
人のいひまに鼻のかしらおと
めきていふ。人の事とよハ
あらぬ。きよくしく申さうちあがめきよくちねり
うるく　そしくせ
して。さりみうるつよくあ
そせてうるうるとハ。おそろしき事なりさうため

面目あるやうにいそれあるべきとふ。人いうくあるふ
す。ゆる人の奥さう屋言ハ。ゆとさもあるとし
物をといそんも沒(ぼつ)くてきてあるかとよ。況(たゝ)人なきへ
かされていたきさまりぬへし。どうもかくるも。ものと
おかき世なりてつるよあるめつしうれ事出
まくよんいるうんをろつうへうしたゆ。ものの
人の物をうりハ。耳おとろくるものとありよ。況人
うさ人をわやしきことをか
さうす　論語述而篇子不語

怪力乱神ノ
仏神の奇特權者の伝記
仏弟子なりく載る所の佛
菩薩鬼神の神変奇特又
神明の不測あることこそ
權者化身の示く人まあ
ることの伝記も不思議
多くあり皆一くいつり
と定ることなり義也

いふもせんなきをきはめ
ひて。偏伝せんとうこと
議のことまあつまりて
文選ノ議同とまり

はいくと。佛神の奇特。權者の
傳記。さのこと伝やさうへきう
もあらん。これを世俗の虚
云を。会ひよ伝ひたるもあこ
うとーく。よもあらしるみと
ハまことくあひしら
こうひあきをうへうに
議乃とくにあつまりて。東西に

いうき。南北よりあつまるきありやーれありたろ
ありとくきあると。仏神あり。ゆう家ありゆよいひて。彩よ
おくぺとるむ所ふことやや。生をむさりり。利をもとめ
てやむ時なーあ。分をやしるひて。何ことをうまつ。彩と
ふ所ふて。老と死とよりそきてろ事すこやうふ
して。会このるよとてまらん。色をまつるのみた
のーひりあんまとへるものハこれをおそれをおそれとる利よ
おかきて。先遠の近きと。我ことりみひて

変化の理を　荘子曰已化生
又化死生物哀之人類悲之
注物之初生本無而有又化
而死則是既有而無同乎一
理而人物之類自以為悲哀
愚惑也

ありぞとろうろう人をみ是を
うらみ。常住のんとを思ひ
て。変化の理をもらねあり
いうろう心のんまきて方ちくやて
ひらをあれとうとよれれぜにきてくへんのかれ塵よ
うはをれてまとひやひくぞ人よまりれハ河よりれきて
よとうひてぞみうう心よあすぞ人よたうれ地あう
そひ。一度ハうを一度ハよまうふて事さまれる

ときぞ。ぞ別みうりよおこるとて得失やむ時あり。
海とひの上よあるて。碎の中よ義をあれ。ちうと
ていうろうくぞ引てとそれうろ事ぞ人うふかくれ
とうぞまうと波れ名をうにうもえんをハるれて分を
有四一生活二人事三伎能
四学問とえり　生活ハ身命
を救ふ産業也　人事ハ人間の
しとよりうりあうろう
伎能ハよろつの芸能　学問ハ
内外の書をとみ事之おほの
うも学我ひのさうりとあれ

周ぞ。事よ欲ゝすしてぞを
やひくせんうぞ。ぞハくたのむも
いひつへうれ生活人事伎強学
問絶れ法弱をやめとこう。

はてやめたる所止觀
乃註也

世のおぼえ栄やうある
冨貴威勢美服のひとあり
かきさもろこひも 或八死葬
愁歎の事時もあり或婚礼
冠礼祝儀の時もあり

歷訶山歎るも仏也

世のおぼえ栄やうあるもあり。
歎も忘れもあるて。人おのくゆき
とゝ姻中よ。引ゝ法師の後一
あてゝいひ入てすこしもとゝまゆ事ざるへ
き故あるとも法師を人ようとくてありゝん
世中にを人のりてあつゝひとさよいひあへる事。い
ろゝへきまゝあゝぬ人のゝ。よく事問たりて人よ云

ろゝときゝ世とひきてたゝうこゝうきゝうきぬで
とゝかゝりゝまゝあゝ。世を法師ゝとゝ世れ人のゝ上
ハとゝとく弱きゝいてゝうゝりゝたゝりきんと。
芸ゆゝまてゝうゝいひちゝすゝ絶れ
今やゝうの事 彩樂府ゝ時
勢粧とゝ云ていゝやゝすゝ
たとよゝり

今やゝうれ事ともれめゝしきを。
いひむゝめりてゝすゝゝ。ゝきゝ
世ゝ世にとゝりゝうまてゝ。ゝぬ人ハゝよゝ。今更れ
人おとものあゝ時まてゝりとよいひつきたゝ。ゝとくさ物

乃ふみとぶらうとも。あることをいひうつ。因ん
あり世をひとてぶらぬ人をぶらすべかる
事。世をれをよろこぶ人の。ふしあり事あり
何事もへてぬ人ぬ。たりそよ紀よき人ハ。
たりことてざのをりかやハいなり。田舎より
ぶ出る人。よろつれをよぶらるよ。ぬ
世をよろこきこと　ふしき
人といふべ
におろく　櫃記ニ口容止と云
表人不尚客不先挙といへる

いうとぶくるきし紀かこれ
ありよくきまへ。ろみちまハ必にたをく。ぶハ
ぬこりハいをぬこいうきれ
人とふ我分ぶと紀の浅のこうこれめ。法師
ハ兵れみちをたて。ぶひとを
弓ひくをへ。ぶ仏法ぶり
ろきをくし。連歌し。愛
絃をこあくり。されと

よををへ

親衆叛親離離以潰矣夫兵猶火也弗戢將自焚也　孫子謀攻篇百百たび戰て

戰百勝非善之善者也不戰而屈人之兵善之善者也

山谷詩百戰百勝不如一忍

兵つき矢きハまるて

司馬遷報任少卿書曰李陵与匈奴單于連戰十有餘日一國共攻而囲之轉鬪千里矢盡道窮救兵不至士卒死傷如積陵未沒時使有来報漢公卿王侯皆奉觴上壽後數日陵敗

敵を降らす　通鑑綱目第二

刘友益書法曰亡國之君其

をろかなるものれう道をりぶを人をひあなどれぬへし法師のこゝろもあらん上達位殿上人。くこゝろをよてをまへて武をこのむ人おかり百たび戰て。百たび勝ともいまこ武勇乃名を定こゝろをゆへハ運ふ窮てあこをこゝく時。勇者

韓五死之上也執虜次之以歸次之獲次之降爲下

人偏よをく禽獸よりき

孟子離婁上篇曰爭地以戰殺人盈野爭城以戰殺人盈城此所謂率土地而食人肉罪不容於死故善戰者服上刑連諸侯者次之　莊子說劍篇曰庶人之劍蓬頭突鬢垂冠曼胡之纓短後之衣瞋目而語難相擊於前上動頸領下決腑肺此庶人之劍無異於鬬雞一旦命已絶矣無所用於國事今太王有天子之位而好庶人之劍臣竊爲太王薄之

よあらんといふ人ハ。ものいきき矢きハまりてつねよ敵ら偏らん。死をやもとりて法嶋名をあらゝるへきなせいきん。

狂ハ武よりこゝろへらん人偏ふとく。會獸よりき振舞。そ敵ふあらんハ好て益ふ死事也

屏風障子あるの絵も文字もかくこれあり等や
うしてかさたりうんよくれるもあるべけ
れどもかくれかゆるせ大うこそてる間敷よてもか
をとりせうるもとはあるべしこのこゝろ拙を
おへしとゝもあらば換せきうんためとて所みく
見よくきたりよもちゆんとて用るきこ
ともをへうくこれこゝろ強いふせ
ゆめしきやうにて。とくしうんづいへまな

くて。ほりうのようきんさうこれあり
うすものく 源氏よ西のちく
薩の屋うゝ羅の字をうす
らのとよめり
倭名唐韻曰羅曾何反此間云
綺羅也らのこゝろ多きもろ
のこゝもあり囉爾の囉れ
こゝのとゝ羅ハ金紗ふとよ
ゆくるものあり
頻阿 小野文久納言然実
拾遺也
らてんのちく 螺鈿軸ハ巻や
の軸よ貝をちりばへうる也
世継上云いまやうのあふひや
つゝふさのうゝ螺鈿の軸よ

うすものく表紙ハぬく換すう
ゝ引きと人のいひしを換たり
うよ拙ハかゝもうる事。羅てん
の軸ハ貝おちてはうゝ
しきれとゝ作ゝうぬ心よりう
ておりしゝ。一説とあるまゝ
みとのおかゝやうもあるぬ

いまてろよむひろ心ち
しるふく
弘融僧都

をんよろしといへと。弘融僧都
う。酒を必一具よそのへんとはる
ふ事也。不具ふつうよろしといひ
しもいしくありしありさへて何も皆ことはとく
のりさるはあきさるもいのこりさそうち重
いさるみろ　源氏よりひのよ
ふと云詞よりはりゆうよゆ
とりあろ　うく
内かの文　内典外典也仏経
とそ内典とす儒書百家を
外典とす天台止観にも十度

のうち二度は毛詩も三
百篇はしち六篇也一周礼
の六官も各官の大学も
格物の借りけうる類多り

或人ゆ行　先賢のつくれる
内かれ文なも。章疏のうけ
たりことのこうう伝き

竹林院　西園寺公衡公竹林
院左府と号也
一のくく　一上八左大臣はしと也
左大臣関白ふれ右大臣
一上也節會の時内弁を
はとひる也
洞院左大臣　洞院実雄公従
一位左大臣山借と号也
相國　太政大臣のくく也
元龍の恪　易乾卦上九元龍

竹林院の道左大臣殿。敬大臣
かあり給ふよりかれとて示
ようおいせんふれとも。つつ
きあり一上よりてやこうんとて。
出家ゆ給ふよりり。洞院左大臣

有悔象曰亢竜有悔盈不可久也又曰亢竜有悔与時偕極亢之為言也知進而不知退知存而不知亡知得而不知喪

月みちてそ　易豊卦日中則昃月盈則食天地盈虚與時消息　釋名云月缺也滿則缺

ものさうりまして

盛者必衰

法顕　高僧傳第三梁惠皎所撰法顕傳曰釋法顕姓龔平陽武陽人也故郷　こゝをくハ支那をさす

ひ事を所ふ法師。相國の空たゝせうきり。亢龍の悔あつとくやぷふとゝ行ふあり。月滿てハくゞ。地盛まくハおとろ悔。ものつ乃ことさきれつまりたゝぷふれよりきみちあり

法顕三蔵乃天竺よりうて。故郷の扇をゝてハくゞ。病

漢の食　支那ハ上唐虞三代ようて元明よりまて数千年の月代この号おかきにをして漢とゝの唐とゝひて支那の惣名とすると漢ハ世をたもつことて百年よあまり李唐ハ三百よ及ぶ故よ全盛の時をとりて号をもろ也ひ云ひ倭韓人崔溥ク漂海録ともあり和漢ゝひ倭唐とゝもひ我也

人の國　他國をゝふ春日宮作の任宜よ他國ゝう我國の化人ゝう我人のと云ゝう

みてハ淫の食をねゝひ弘きぶことをきて。さんゝうの人の。ひげよりゝ仏よりゝ化まを成。人乃國ゝてゝんえたまひきれと。人のゝひーよ。弘融倍都優よ情あと者ゝ。三蔵ゝうあと云ゝうしゝう法師のやゝうよもあゝぷよくおゝしゝう

正直の人をとるべし　論語

十室之邑有忠信といひ孟子性ハ善也と云心也

賢をみてうらやむ　論語里仁篇見賢思齊焉見不賢而内自省也

賢ある人をみて　大学人之有技媢嫉以悪之人之彦聖而違之俾不通

下愚の性　論語陽化篇上智與下愚不移

狂人のまゝ　淮南子言狂者東走逐者東走東走則同所以東走則異

悪人のまゝ　揚子法言二曰人之性也善悪混脩其善則

人乃心すなをなるねハ偽なきふしもあらんにされをもつて。正直ハ人をとるうんを成こすやむハ偽常也いつるとをろうろ人ハ。ふ人くの哭をみそこれをよくみ。おれなるの刺をえんうあんにとしきの

為善人脩其悪則為悪人

たてんとすとうとろ。をのきう心にうへるにうるとて。ぬ。ぬ人ハ下愚性うつへくすいはハ

ア。て。ハ刺とも辞をへうんにかるとるも愚を学のへうに狂人のまゝとて。大海をしらハ刺狂人也。正人のまねとて人をとるさハ悪人也驥を肉ハ驥のたくひ羣をまるのふの

驥を学ふ　揚子法言二曰脇驥之馬亦驥之乗也脇顔之人亦顔之徒也

桀を学ふ　孟子滕文公上云顔淵曰桀何人也予何人也有為者亦如是

孟子告子下云曹交問曰人皆可以為堯桀有諸孟子曰

堯舜之道孝弟而已矣子服堯之服誦堯之言行堯之行是堯而已矣子服桀之服誦桀之言行桀之行是桀而已矣

惟繼　一ゝよ俘嗣ニ云ハ非也
惟繼中納言平氏西洞院嫡流也

風月の文よとめる　詩ハ文章の文也ニめてとゝのをりまおりくあり義之園俘僧正　伊平大納言ハ豫之風雅集ハ前摧俘正園伊ハ忍待ニの心をよめる歌

らひのハ俗も人めをはくめてとゝ文ふつゝさをまもれてそまの文保　花園院の年号也元年

舜ハ徒なり。ゆつりてもの人をよまんと。ゆへ。

惟繼中納言ハ。風月の文。とめる人也。一生精進まて。淡強うちして。寺法師の園俘僧正と。同宿して。行きるゝ。文保よ三井寺やられ時。坊主よあひてハ坊主ハ寺法師と

八月九五日山門より三井寺を焼ゝとあり

寺法師　法山多ゝといへとも山と
ゝりの小対ハ比叡山也法寺多
なれとも寺とゝりの小ハ園城寺
也園城寺ハ別三井寺也

秀句　秀逸のゝ句ゝとゝ歌しあれ
とゝ中ハ俳諧の戯言也

下劣の者ゝ
ふまへきしとゝり　ふつゝ
すへきし
やむひ　眼　ひあ一　釈
む俗ゝ
ゝゝゝあゝりゝとゝり　玄法の
俗ゝ見ハ具光坊ゝ翁ゝ

不部ハ酒のまゝ者心とへな
ゝ也。ゝ法ハ俗ゝ花のこゝ系
ゝ也。ゝ法ハ俗ゝ花のこゝ系
ゝ具光ゝ翁とゝ。ゆまめきこゝろ
遁世の俗ゝ。こゝうとゝりき

うくとのこゝぬ　源氏夕紅の巻
おくくとるこさぬとありか
ハるく　あるこ　河海ハ
えたるうくくくとうくくを
ねをのこそうくくくくを
源氏類聚ハるくハ結とと
あり今こゝはて八結をのむ
とえつへきこ

いうこうれんさうきくくくとのこゝぬをかうち
ちきてぴくしきをれん漢ちーくおりえてぴ
昊して行りよ。おゝ幡のりりまて。なふる法師
の兵士あまこ昊してあひうこぴ男こうひ

さいぴつひよりぴつひうこ成時
迎ふ。馬ぢつつうりきれこ。
つうこまうりとうぴつきのおのて
ぴ。ん一変せこ男よりて酒を

て月芸にうり山中よ。あやしきそとりいへて
いひて。ぢ刀をえきぬきれそ。へもみぶを刀ぬき。
矢こきをりとしきうを。昊えなをををるこ。
うり心　万葉ハ規心とあり
源氏類聚にうり心ゆこぬ
とハ粗乱心
まきて　枉の字也枉をまり
くこうひうこ

うり心ひるく碎こうをれん。
まきてゆうり結ハんといひを
さこ。ものく啄てるぬ。ぴ月
昊芸房よあひて。ぴ房をにあ
ぢうありか。をのきこるひうこ弟結ハん

とすろ様ぬきろたちむのくに法ひつろと
いるまて。えさきるさよ。きりおしつさて。山さちあ
るとのしるとれて。墨人おろるて。出あへ。ハるれこ
う山さちといひて。ろつるとりつてきうまり
きろこと。あまくしてをおせぬ。ゆせて志りきる。
馬ハ血つきて。字治大路の家かそりる入り。渉
まーとておのことまあまさそらうーられ。具
笑ゑ。そくちあーいろよゆよひあーいろを。そとと

くちあり糸。木幡の道子
くちあり糸おかり。彩左金記
知家の子。
木幡山あろハさあろくいありのの
やとろとてもこくへやろせん
おらひあーうう　呻吟

道風　河海云木工頭小野道
風正四位下参議孝守孫
大宰大貳葛絃男
仍相傳うきろ事よそ　相傳
実ろき事ろてハあしとく
うきろハ海風の我ろろ人し
て除大納云　公任卿也康保
三年生萬壽三年〈道時六
十一歳

出。ぬうきとてきろ。かく
き命いきられと。腰きり換を
られてかとよりにろう
或者小野道風のうきふ。和
漫朗詠集とてをちうう
きろ様。或人仍相傳うきろ
事ろへ。ぬくーるれともに
条大納云えくーれろ物

道風死去ハ公任逝生ハ年之
和漢朗詠集　公任の撰まゐらせ
上下巻あり前ハふしをつ巻
てゝゝひらゝとゐん日本人と唐
人との詩文の句を撰まゐりて
和漢と号まゐらゝ詩文と和歌を
載故ゆ云ゝ但和歌ハ公任卿
の人書加ゐらゝ世俗大三條関
白教通を聳ゑゝて朗詠
をり少抱ゆ撰まゐらゝとゐん

猫まゝ　和名猫音苗　孫　善捕
鼠也金花猫ハ美ゐゐ猫也え
けて婦女をおりて煩をま
ゆも雄猫ゆおりされゐゐハ雄
をゐゐそ先を治ゝ唯猫ゐ

と道風かゝんと時代やた
うひゆん。たかつゐまくゝそ
といひきれハさゆへゝゐ世ゆ
ありゝそ。猫ゆゝゆゐとゐれと
てゝよく秘義しきゆ

奥山ゆ猫まゝといふをゐあ
てゝへとゐゐゐゐと人のひゐ
るゝ。ゐまくゝねとゐもこまゝゝにも

和ゐされゐゐハ雄をゐゐ人て是を
治ゆと云事後耳後月令廣
義ゐと云書ゆ見ゝゐゐ

何ゐ所　まゐゐたゝゝゐゐゐゐ
行孫寺　元亨釈書十四云釈
行圓鎮西人寛弘二年遊帝
城頭戴寶冠身披華服都下
呼為華上人於賀茂神祠側
営行願寺安千手像以圓衣
華俗呼行願寺為華堂

猫のゐあゐとてゐねこまくゝゐゐ
ゐとて。へとゐ事ハあゐゐ猫ゆと。
ゐをれ猫きゐゐをゐゐ所ゐ法
仏とゐゆ連歌しきゐ法師の。
ゐ猫きゐの島ゆありきゐゐ吟
てゐゐゐあゐん分ハ。仏とへゐゆとゐゐと云ひ
きゐ所も。或所ゐて来ゐゐまゐて主ゐゐして。只
ひとゐを猫ゐゐゐゐゐゐて音にきしねこ

まつ。あやまちをあらためんとするときてやうて
うきつくまゝよ。ふねのうへとをくうんと手。肝(きも)をも
てゆせんとするよ力もなく。長もうけぶ川へころ
む入てだてきをよわねこまつ。ようやくとさきへハ。ぶく
ふり松ともちりそ。ぐてるとうてんれハ。ぶとう
よ乙てまう。偽ありこハいよとて。河の中よりさ
きおうこうれん。連京のうをとりて。扇ぶ鈴(こたち)
連京のうけ拍　賭

あとと懐(ふところ)よ持こうきるもなうよ

いつもの奉(けう)のうをよりてたるとりこうさりとうて。
ふく家よ入よりうが。ひきうたのくうきれ
とう。ぶ紙ちりてうむつきこうきうとう

やとう殿　安浪殿と出狩

大納言法下乃めつうひ
しし弱先(とうまう)やとう殿(とう)ぶも
のをちりてつゆよゆきあひしよ。武州出てう
ふりきこうを。法下のつくへゆきつうとうひ
しうハ。やとう殿のうりまうてひとふうう乃

やもすれば男の法師のとゝれて。彼うきあ
ゆくさあり世て　さらうも　ゆくいらん頭をハゝんはハ
めの術欲

赤舌日　赤口日也　通書大
全曰赤口日是會客議事買
賣　又云主口舌官事
赤舌日と云事。陰陽道か
かるくよみよろくもとあり是
也口と舌と図一義〻
陰陽道　職原陰陽寮掌天文
曆數事昔者一家兼兩道而
賀茂保憲以曆道傳其子老
衆以天文道傳弟子安倍晴
明自此已後兩道相分

うしなひつ。全うしてとあらんとつゝをうゝ
去日我えうひてゝ。ゝうゝ日され。そゝをとゝぬを
うゝてゝんゝ。ゝ。ゝうゝ人ゝ。そゝゆゝ人ゝ。せ
無常變易の境　迴盤經諸行
無常是生滅法生滅〻已寂
滅為樂
天台四門有門空門非有非
空門亦有亦空門
圓覺經幻身
始うゝ幻化ゝうゝ
滅故幻滅亦滅幻滅〻故非
幻不滅

常變易のさゝひ。ゝうとん
ゝ。ゝのゝも存せゝ始あゝ
ゝ。ゝも滅ゝ。志ハゝきゝ。
望ハゝゝゝ。人のゝ不定

何ものゝ為にか仕まつる　歌氏
よ成住壞空の説あり
善悪は悪をみすて必函あり
たとへばうゝゝの老の耳の凶
よあられも善るをもれば
必善をうゝゝと
必函也。悪は善を捨て
といへり。善函は人よりまさるべきなり
中庸子曰射有似乎君子失諸正鵠反求諸其身
九二
或人問ていはく
ゝろ矢をたてまつりて的はむかひ。師の云初心
のゝ人のゝろの矢をもて
矢をもてたてまつりて的はむかひ。師の云初心
の人のゝろの矢をもて

てゝゝ矢の矢よりをさりれたり。毎度に
得失多く。乃一筋は定へゝゝもへとも。高
ふ二ハ矢。師のおもてゝゝとをゝろをもて
とさくんや。惣意のゝゝゝゝゝゝとをいへとも師
意をもつ。ばいまゝめ万事ゝゝもへし。
道を学ぶ人　論語里仁篇
朝聞道夕死可矣ゝゝ朱文公
勤学文勿謂今日不学而有来
日と云る義は通まゝ
道を学ぶゝゝゝゝゝゝゝゝ
らんことを思。須臾あんん
ゝとをて意ゝ仮せんことを期

一刹那　一弾指頃六十五刹那

うちうをいく。せりぱくんや一刹那ぞ
やあんうあ今は一会うをいく。そてちふ
すると云ふ。このたぞ
牛飯うを出あり。買人。明日をあうひあや
つてはをとんとのぞれまふはねかん
とする人は剣あり。くんとする人は換あり
ところへあり。是をきてうへうのいく。

牛代を換は換あんといへとゆぞうを人あるあり。
そう故ハ生あるを代死のちうさうをちうう
と。牛改はあうあり。人まうあるのうちうち
は牛を死ちうちうちうを人ハ存せり一日は
一日、の令　大智度論曰設滿世界寶無有直身命　令万金ちうもあそ。牛
鵝毛ちうも　司馬迂報任少卿書人固有一死或重於太山或輕於鵝毛　のあうひ鵝毛ちうも軽し。
死をうくまう　孟子告子篇　万金値えて一歩をうしうん
生亦我所欲死亦我所惡　人換ありといへうへうをとい。

皆人嘆そ理ハ半のゆゑかきりなくして
といふ。又いとゝさられて人死をまくまん生を希
をへ。存命の恢はたのまるんや。
とろうの人び樂をうるをれていろ〳〵
和のようひをとゝあ。山賊をうをれてあや
うく化の賊をむさりうの志こつとあ。
いきろ百生涯をの生涯をあつて死よ除て死
生死の相よあつゝ今 教氏ハ
不生不滅を涅槃ゝ生死
を恐ハ山をうあへうゝ。

即涅槃とゝ根本の聖愚れ
ハ識田中下阿字一刀生死
亦断涅槃亦断とゝ莊子
ゝ死生大なる生とも変もろ
ずあさくすとゝ老子の
死而不亡者壽とゝ人る是等
生死の相よあつゝさるなを
云ふる
実の理をえゝ　玄義第一
心名不生亦復不滅心即實
相
人いよゝくあきける　老子の
下士ハ道を聞てゝらゝふとい
る也

人皆生涯をあゝまさる也。
死をおゝきさるゆへあり死
涯おそれさるハあゝす。死の
ちゝき事涯ゝすゝゝあり。を
ゝ久生死の相よあつゝ
すとゝいて。実の理をえゝ
ゝやきいへゝとゝふ。人
いよゝくあきける

半盤井相國　実氏公也公経
公の子西園寺流也

北面　上小面下小面とてあ
り上小面八位大夫也下小
面八五位六位殿代の侍を云
ふ惣院御宇曰幡堂の額を
平等寺と号し宸翰を賜ふ
ときは勅使車よりおり
門陣へやりとをして勅額を
納さるゝ彼寺の縁起よ
あり勅也ゆゑに人は車
をおりて内へ入也

常盤井の相國出仕為なる
よ。勅書を持ふる小面あり
まつて。馬をおりおりきを。
お國ぶよ小面をかゝ小。勅
書を持ふゝ下馬為なり
一者やうれの為いてく者
と。とやきれ小面をつゝ
れ馬のよゝぶゝきてんを

そてまつりへ。おりへゝすと和
名抄ハ軸ハ　軸とハ表
紙とハ右也背の文字ハ表
紙のやゝ上一方ハ付と
ゆとゝ又ゝ方ハ開一筋也右
右のくゝを引とをして一
方ハ一結むを更結ふを
結ふとハ

猶乃ゝりゝよ緒をつゝ
ゝ。いつゝよつを作へきを
とあり宵織の人ハ弱中他
うゝ。軸よつを表紙よつゝ
ゝ。文の為ハ行
ゝ軸よつゝるゝ小〇の
為也

半ゝ為ハ表紙。いつゝ
ゝを右よつゝ。を結ふ
と也。を作ら也

めあり　説と不同　稀蕣　めありみといふまありくち
地松　天名精　鶴虱　ハ
上今の世俗ゑみをしといふ
和名集曰慕耳と訓し天名
精と訓す稀蕣老本草注
蛇咬説ゑみ　茎葉頗同蒼耳
と云り此説ゑ今俗めゑみといふ也　地松本草曰地松即天名精其實也
生蟲蛇螫毒接傳之云　又本草蒼耳の条下ゑ治毒蛇并射工等傷嫩葉一
握研取汁和温酒而灌之將滓敷傷處　私曰稀蕣を世俗ゑみめゑみと
いふ也　天名精　地松　鶴虱ハ　一物也此三とめゑみ又通
てもといのちり草とらのゑ但鶴虱ハ實也されとも世俗蒼耳も蛇咬ゑつゑ
とゑえゑりさんともゑてつくろとあつゑれて地松の説是此書の説ゑ
お合ちり所詮いのちり　まて此今俗ちりもちろへ　但兼好時代ゑ月
地松　めゑみとといひきろゑや

ひとしてをくへし

小人ゑ賊あり　ゑ子ゑ仁義
あり

老子曰大道廢有仁義
莊子駢拇篇意仁義其非人
情乎彼仁人何其多憂也仁
義又奚連ゑ如膠漆纏素而
遊乎道德之間為哉使天下
惑也唐代招仁義以攙天下
也奚必伯夷之是而盜跖之
非乎天下盡殉也彼與殉仁
義也則俗謂之君子其殉財
貨戰也則俗謂之小人其殉
一也夫適人之適而不自適其適雖盜跖與伯夷是同為殉者也余聞乎道德
是以上不敢為仁義之根而下不敢為淫僻之行也　同馬陳籍嬰道德以為仁
義聖人之適也　同時筮箱攘棄仁義而天下之德始玄同矣

やしきをゑふ物ゑつきて其物をついひあり。ゑゑ物をちら
ゑ。家ゑ風あり。ゑ風あり。國に賊あり。ゑ人
ゑ賊あり。ゑゑ子ゑ仁義あ
り。僧ゑ法あり

僧ゑ法あり　源氏地ゑ吉祥天女法をくさとろり　維摩經云法猶可捨

而況や非法を止観云観法雖正著心同邪

ゆうとゝ紀元をきいひとききろうとゝかさう
きて。一書芳淡とやゝ名つけうゞ茶をゝん
作よ。公ゐあひておうゝ事とも
一ッちやせまゝせちやあゝまゝとゝ事ハ。
打ゐやうせねきゝよ紀ゆう
糯法飯　えんゝハぬゝゝゝ　一切世をゝりん者ハ糯法瓶一も
飯ハつゐゝゝり糯粢も糯粢
も素たゝとも者
指ゆ　きるゆ持種ゆ考に

いろうまて。よ紀把をゝりゆうゆきゝとゆう
一道世者ハゆきよゝとうきぬやゝとゝうゝひて
さゝゝ家。宗上れやゝゝまてあうゆう
一上膚ハ下膚よゆう。智者ハ愚者よゆう法人
ハ貧よゆう。縁ゆう人ハ無縁よゆうへきゆ
伝道をねゝよ　釋家ゝ教ゝ暑ゝ　一仏道をねゝよといゝハ別の
云ハ万事をゝゆゝまゝるをゝゝ
事ゆ。いゝとゝゆ家ゝ分ゝゆうて。世ゆゝ
とをゝゝうゝきぬを第一の法と者　けゆ

堀川の相國　基具公也久我
の一門也

ものあらそひ　おこれる仮なり

大理　職原曰撿非違使　使庭
淳和天皇御宇天長年中初
置之異朝九車此職昔唐虞
代皐陶為士此又大理周礼
立官之曰大司寇即此任也
後代置大理寺本朝又以刑
部省為紀判之官天長年中
准唐朝置使廳蓋是大理寺
也但別當以下為宣下職為
衛府之人補之又別當一
人　唐名　太理卿　参議已上九擇其

堀川相國ハ。義男ぬしの
人なれども。事とあくまを
こゝを。ぬしの子基俊ぬし
大理まゐて。廳勢おこる
れるよ。廳屋の唐櫓み
ゑてゝ。ものあらそひ
あるべきなり。作られ

人也補此職之人必帯衛門
尉衛督世俗説補大理之人
可備七德所謂諸芸器量才
幹有識近習寄儀冨有才
廳務　廳ハ換非違の改とき
くゐせ廳の字とまんとも
ろと作り
廳屋の唐櫓　所仕文書を
を代く入とくりのゐ
和名抄に鑊櫓と也り
めてくく作り　ろろく
法擇は作らんとも
規模　規矩模範也

久我相國　雅実公也

まろよ。此唐櫓ハ。上古ろう作
まてゝ。ものあらそひをもつゝす。数百年
をへゝ。黒代乃元和古幣を
もつて規模とも。たやす
くあゝめられてきは。
故実の法官おゆ。まれ。
そろともやこよろう
久我相國。廳上まて水球

土器 かわらけとよまするなり
しるよむ筥會の付け盞也土
まて作る馬上盞なりけり
海ろ也 也足素然云殿上の
定器を云あり昔四位五位
六位殿上は日夜つめきた
ちつる也是を殿上人と云朝夕臺盤に著て食せ也長嘯子ハ鋺のまとまりの
とちつりされとも日本記は王鋺をたはのまりとよめり一書に玉蟲玉瓶
やあれん兼良公もト部兼倶も鋺ハたゝえありとなとかく
和名集金椀日本靈異記云其器皆鋺俗云賀泰萬利今案鋺字無出未詳古語
謂椀為磨利亘用金椀二字也椀即盌字 ぬりとまりといふなり
或説は貝をもちゐて低きを飲器とまりといふ奥州の田舎にはあるとぞ
今堂上にてはつねに遊年用られさるなりとぞ

仕大内の節会 かと云ふ
階乃ちとり西ちとりを撰て

或人任大臣の宴会は内弁を

行也是西礼の義あり
内弁 其日の一れ弁也
宴会 内の大内記也て出
堂上 紫宸殿へのぼる也
失礼 ちらしとよむ巨失
の義也
六位の外記 外内記と云五
人あり
康綱 中原康綱正六位上權
大外記歴徳治以来五代從
五位下日向守源重尚男徳
治年中改姓中原

つとめられるよ内弁はかりにて
宴会をとりあつめて堂上をも
失礼なりきはまりなき失礼な
ことも出来るへきなもあ
りけりとうけられる六位外
記康綱きぬるきけ失礼をかさ
らひてはは宴会をもとりあつめ
やうなきせりいとりきり

尹大納言　[illegible]

追儺　儺者何文又乃多反又八
ーく上ちたくくり事文類聚
云昔顓頊氏有三子亡而為
疫鬼一居江水中為虐鬼一八
居若水為魍魎惡鬼一居人
宮室區隅中善驚小児為小
鬼於是以歳十二月命祀官
時儺以索室中而駆疫鬼亭
東海度索山有神荼鬱壘之
神以禦凶鬼為民除害曰制
駄儺之神季冬先臘一日大
儺諸之疫　呂氏春秋云前
歳十日擊鼓駄疫癘之鬼謂
之宵除亦曰儺

洞院の右大臣　實泰公又號

尹大納言光忠入道遁世
乃上卿をつとめられきるに
洞院右大臣敏[illegible]
[illegible]ら[illegible]ときは又[illegible]卿男[illegible]
師とするより[illegible]
[illegible]ときのさまひろ[illegible]は又
[illegible]卿は老[illegible]湯[illegible]
[illegible]

後山本
次第[illegible]
[illegible]
又五郎男
衛士　湯門兵湯の被官人を
[illegible]の也
軾　名目抄云脇突と云り
小半疊のうすつくりの和名は
軾を車前にして車のそ
きにあり仏をひさつきと
ハ不同
火たきてきよくひきろう
みなき寺湯[illegible]
[illegible]ハきえて拍をうちとく
大学寺殿　後宇多院也

後山本
[illegible]近湯敏[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふそく　謎の字也　玉篇謎
未詳切　隠言也

ふそく　忠守　丹家康頼十一
世孫忠守典薬頭内院暴殿
歌人正四位下
公明　侍従兼官也正親町三
条庶流也

ひら　紙子平氏　忠盛の父也忠
盛八清盛の父也忠守忠盛
ふそく　平氏紙子聲相
通ずる故あり

ふそく　かくすあるはそ　そのそ
ふそく也

とも。おそくをつくりてとれ
きろ雪よへ。くるし忠守多りく
ひろよ。侍従大納言明卿。
我紙乃ものとも。ねる忠守
とあそくよせられろを。唐紙
子とときてよろひあられきれハ。
腹ちて退出よろり
きろ宿乃へめあきよ。女

ある人をあうひ給ふんとて
けあるへ人ハ何人をやけ人のう
ちきをぬ夜よ始成元也若又兼
好ら自詠さるうや

給ふんとて。夕月雲のあかつくるきりよ。志のひて乃
おハ。うよ。ぬれとしくとくむれ。ぬ下を女
のいて。いつくまりそといふよ。やて案内せきて
いり給ぬ。ぬやうきまる有様。いて。ものをんをを
ぬくる。あや。沈枝数よ。ハ。ち給ふる我。
をて。をつめうきをひぬ。ろやくまろ。てこをこと

ところせけあり　ゐせえき
ある

やつと戸をあけて入ぬる門はさすがに
すんなりとぺハあるさまなれども物はきくるとんえ
俄ものあるぬるあひ　ゆゑと
たさきあるるるりしさ　て儀すもあるぬ匂ひいるつ
門よくきーてよ　丈夫ーもれ　ホハウ　ホ
下部よりひつくろ鍋へ
あるうるる　取もかうるる
すんと云也
こゑひいやまきいハぬへあ
こうひハこそろやそくぬへき也
と云て内方ものさて矢く
あり

とうちさくめくるものひろれとかるくれてかけきこ
ゆ。さてひ花の事ともぺこれやこのよきこえ結よ。東
ゐ紙をもあきぬ。うるとれ来りけてやめやうるう
ハ。把流よ。これひハをもるるるやうるーをよちも
きれハぬえあるくるやと哭結へと。東ゐくいそくへ
義ゐれさるるもあるるねハぬたしたゆく結へ易ゐ
ドもろくまれくろくれ事をるいひて豆出るゐ。
撫も雑もめつしくあをこをるるいろ。卯月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ふめよかそ道よそ。馬よ寄ろ女ゆきあひくりきろ
ぷに引ろ男あくぬきて解け馬と添へおろして
狼藉　藉ハ踏也狼の跡を踏
ろろろろろろろろろろ
き義ろ漢書作ようろう
ぷ紀の男ろ　法華經比丘比
丘尼優婆塞優婆夷　翻譯
名義集第一比丘名乞士清
淨活命故又云名含忍義一
破惡二怖魔三乞士又翻云
除糞比丘尼通稱安為尼尼
得無量儀故應供比丘又
稱阿姨優婆塞名信士男優
婆夷名信士女又云清淨士

清淨女雖在居家持五戒男
女不同宿故云善宿男女西
域記鄔波索迦唐言近事男
舊曰伊蒲塞又曰優婆塞皆
訛也鄔波斯迦唐言近事女
舊優婆斯又曰優婆夷皆訛
也言近事者親近某事諸佛
法故又曰百歳比丘尼見初
受戒比丘當起迎送礼拜問
訊請令坐比丘不得罵詈
比丘ろ得記尼過

分ろ比丘を婿よき入さと示。
来ろ男ろ女ぷ依ろ作ろく
ろれぷに引の男ぷ依ろく
やんぷえろ女ろねとよよ。
人れいきまれて。ぷとよそ抱
海抱ろれ男。とあらくかまひ
てぎぷよりろ放云ろいと
ひきろ氣ろまて。馬引匠

いきゆきて　源氏物語ぷ
のきんへきゆきまくへきと
河海よいきまくへきと
いきとろ義歟
ぷろう　放言ろ出ろ

てよきこれなくりたくとかく
くろいさくひあるへし
女乃物いひけるを返事。こりあへもせさりはなる
男ハ有くるに物をとて。亀山院のに時。たれる世
たれる変　まれる変　まもなくき男ならはまいらく
てよ。郭公やきて給へると問て。ぶんくれくふ。
あかすれ大納言とくや。教をねかえきに給と
塔川の内大臣　具守公也歟
岩倉内大臣

岩倉きてきてこひしやんと作れるきる紙。
見ハ雑あり。教をねかむつ〜をと定あれる。
をておれこをハ。女よりれぬやうにおくしへ
浄土寺ハ前関白　九條兼実
教公号巴心院又号浄土寺
元應二年六月七日薨四十
四歳
安嵯門院　後堀川院御妻
寺大改入道公房公の女也
山階の左大臣　實雄、安氏公
の才西園寺の一家洞院実
雄號山階左大臣

しれ下女の人まうもぴとうくぴつろひせらうと
社作られきれ。女れ女れ世ぞりせ、衣紋も冠もいろよ
もあれ。むきつくろふ人も行ひ。かく人よそちらく
かく人よそちらく女
をより一結して女のむあ
めりすをを云
人我の相
蔵乗法数云般若四相
我相――執取自体
人相――数取餘趣
衆生相――種〻変異相續
寿者相――一報命根不断

女ぴりつりいにしきぬうとやに。
女れ蝶ハ結ひうめ人我の相姫
く。貪欲甚しく地れ理をう
ぴ。くぬよひれうよふもいやく
うりぴと驚もたうをぴうし

うぬ事とも。この時ハいそすぴ風云あううとんきえ。
又あきまれ事ぬてとりすかうりはひあすぴうく
たくりうかうれるとハ男の智恵ものもようりうう
と云へ。そ事ぬうりあくりうくをもうすぴとあや
あうすてうくるれ抽、女也ぞんよをりうひて。
ようぬいをんうとハをうりうしぴうれねうる女れうう
かうりんを。咲女あうハぴそれも地うとくはを面
うりをん。てまひをあうりとしてかれよをうう

附やまとものがたり

寸陰を惜む　淮南子に曰、聖人不貴尺之璧而重寸之陰、時難得而易失也　晉陶侃曰、禹惜寸陰、人可惜分陰

一生をくもれるう　理を知て光陰を行まねうとるう

我おろいうきよの日　暑下の牛羊れうくよ似うり金盞のすをして一生を送るハ柱過ぎ

生類施憐と云よ似うり

附天運　小字宮見襲交爵封

秉樂公世　称謝康樂幼穎悟

文章之美與顔延之為江左第一世称頗謝云云

法花の策受　四、法花添私法

花芽陀梨法花妙法花ゑ

いひて文殊の翻譯あれも

天竺りろハ一ろ誉も天

竺波花の熟筆ありとく

ともろ誉ハ兼好ろ後の

世代人ゑれ先もりつう

ゑ一と代世よ行くくハ晉

羅什の翻譯まて其弟子僧

督ゑ筆ゑ也天竺の梵筆を

唐土まて通ずるを翻譯

とふそれを唐字よかきろ

ゑを筆受とゑ但盤筆ハ天

竺ろ筆受也

恵遠白蓮のまいうり　庐山

の会を法門也晉の代代人也

そこひてやりまれハ命を捨つ

ゑ　ちまちよいろうされハ百

人ハ。とくく四月を惜むへう

人ハ。とくく四月を惜むへう

ハ。ハ。その一念。むゑ。くるう

と。ハ。ハ。世へ。そ。人

来りて。我命あす。必うし

ありうへし。と告ゑ。せうん

よ。きゑれうして。何事をこの

佛祖統紀廿七廬山の遠公往
生淨土の業を脩する故を
九品蓮臺に社友といふか
を以て蓮社と云ふ　高
僧傳曰僧慧遠居廬山與劉
遺民等結白蓮社淨土宗の
了譽ゝ直牒の第九に惠遠法
師衆をあつめて十八日念仏を
約して淵明に靈宝を流よ
ゝんとすゝを淵明とハゆゝ
ー靈宝をハゆゝさす人こあ
やー及て淵明ハ酒をたゝこ
とゝよ放逸也靈運ハ有智
精進の人也何とてかれをい
れをいきさとゝいふ惠遠
頌を作ていとく　靈運不

たのみ。ゆ事をうけとゝまん。
ゝれ〳〵ゝいきゝゝみれ。ゝんを
ゝを時ゝよ〳〵とゝん。一日ゝち
よ。飲食便利臨眠云依行
歩。やむことをえをて。
くの時をしゝ。をあゝれ
暇。いくくゝゝぬちよ。益
の事をゝ。むやくれをいひ。

入心雜起故淵明競引心專
一故とゝ靈運ハ法花執
業ゝ者也雜起心ありて餘
行を脩をきらふ故也
風景の形をひ　風景ゝ景乳
をゝとゝ〳〵ゝをゝ也ゝ
ゝゝとゝ樹靈運ハ諸邑ゝ徧
歴をゝてゝゝゝゝ詩を
つゝり風景雲乳をゝ〳〵
ゝゝゝゝゝゝ心雜乱ゝゝと
て淨社へ入ゝをゝゝゝ
さゝりゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ蓋のゝゝゝゝ樹ゝ
死人ゝ同ゝゝ
止ん人ゝ止ゝゝん人ゝ

ゝ蓋の事を思惟して時を
ゝつものゝゝゝゝゝゝゝを消し
日を直て一生をゝゝゝゝを
ゝゝゝゝゝゝゝ樹靈運ハ法花ゝん
業ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ものの　止ハ止觀修ハ淨行
也是觀行の二也

ふかく　ひとのこゝハ。内よ思ふ心ふかく世まる
くて止ん人ハやゝ。修せん人ハ淨きをもとせ
人をもきて　技の生也法愛
を教子をも

人をもきて〳〵ときまにのかせて。おもをきゝせて。
いとあやうく見し狂いふ。ともくて。おるて時よ
ものゝ　ものゝきりよ。ぬて。あやまちすぶ。心して。うとと
縄をけ作をくりにのりてハ。ひおるてやも

れりあんいにかくいふとや作ふ。もこまに。
同ものめきなあやうきりとハ。をの。きうれて結
聖人のいまめふるう
易繫辭曰君子安而不忘危
存而不忘亡治而不忘乱是
以身安而國家可保
鞠も加くさを蹴ひて
韻會鞠居六切說文蹋鞠也
徐按蹋鞠以韋為圜囊實以
毛髮蹴鞠為戚亦曰蹋鞠古
今注黄帝習兵之勢刘向別
録蹴鞠黄帝造以練武士或
云起戰國漢霍去病傳索隱
蹋鞠注服虔曰穿地作鞠室

きは。ものゝ。きは。ものゝきは。ものゝ。きは。ものゝ。きは。ものゝ。き

也

双六　說文博局戲六著十二棊古者烏曹作博丹父子曰博盡閑塞之宜得周通之路聲譜云博陸采名也陳思王製双陸局置骰子二至唐末有棊子之戲未知誰置迷如骰子至六散合作投投擲之義今作骰非

とうろく　貧ぬへきと棊して。そこをつかへて一めありとも。をそくまくへきてよしなく。をーしきいの道をもとれふをーへ。分を治め國

とたをこうんひをこ大のあり

囲棊　博物志堯造圍棊以教子丹朱或云舜以子商均愚故作圍棊以教之其法非智不能也論語陽貨篇飽食終日無用心難矣不有博奕者乎烏之猶賢乎已　孟子博奕好飲酒不顧父母之養二不孝也

をこ　酒を飲し殺盜婬妄を犯す波羅夷罪と云書もノ如聽罪とゑ也人の頭をきれん事ハ生せさるうしくしこ罪を犯すハ悔ても減せさる也　五逆罪殺父殺母殺阿羅漢破和合僧出佛身血

人ハ。をこ又近しても西される悪事とそこのとある事のやしと。耳よとてありてい

うしくおかえ作る

ゝ見ハをを國へなもしくへしときうん人よ心をつくよう子人

うんさとぶいひうきてんや。儀礼大事ともいとうみ。
河にみきくこともあるへハ代礼ときていれをそ人の熱気
足れみちうを一
史記伍子胥捕楚乎王墓出
其尸鞭之三百日吾日暮途
遠吾故倒行而逆施之註子
胥言心在復讎常恐且死不
遂未心今幸而報豈論道理
乎譬如人行前途尚遠而日
勢已暮故其在顛倒疾行逆
理施事何得責吾須臾乎
史記主父偃曰吾日暮途遠
故倒行暴施之
嗟跎　韓文烏乎吾意其蹉跎
式いつまれとうさりかさかぬ。

註言不遂其意顛倒蹉跎失
時也一曰跌也　異分ゑ蹉
跎とあくハ非也
信そもまりし礼義そもしー
世俗のそこしかくきよ
てこれとうるハとせハぬひ
もおくぶもくしく心の暇
をあく一生ハ雑事れ小芸ハ
さへられてひのく芸あん日
芸道とを事業改ま蹉跎
ゝり法縁を放下をへき所也。
伝ともまそこ礼義を
荘子逍遥遊挙世而誉之而
不加勸挙世而非之而不加
沮定乎内外之分辨乎栄辱
扶眼患之禍也直躬証父屈
生溺死信之患也鮑子立乾
勝子不自理廉之害也孔子
不見母匡子不見父義之失
也此上世之所傳下世之所
語以為士者正其言必其行
故服其殃離其患也
毀ともくくぬー

之境斯已矣

物狂ともいへ。うつゝ物情あり。とも云へ。そゝるとも。くるゝ。かむとも。きゝ。いれ。

ゝ十よもあまりあゝ人ぜ。さめきたるゝ。そのつゝ。

ゝれひてあんいゝ。ゝせん。とにゝち出て男女ぜ

ゝ。人のゝへ。まもひたゝりて。ゝ。まをくゝらし

きれ。たゝゝ。ゝまゝ。ゝゝゝ。ゝき事。ゝ人ぜゝれ

へまゝ。ゝゝて。興あんとぜいひぬゝ。教あゝぬ

分よて。世のおゝえあゝ人を。ぺゝてあきぬよいひゝゝ。

饗應 あゝ。ゝとよゝゝ

八宝よ食物あゝ。ゝ。ゝ。ゝ

とハあゝ。ゝ。ゝ。

今出川の松ゝい弦 菊亭兼季公也西園寺太政大臣實兼公三男也

有栖川 歌枕云有巣川李院ノ川ちゝやゝゝいつゝさのゝゝれ

あゝ。ゝ。ゝ。

又いとくるしき事なみとしハ
あれてありそ川いむすさ
をもうつろふ 西行法師
右奇院行りさ也後て
まへをるをきろ小おりて此
まけろ丞へ女房をよりつくり
くろとあん 一葉抄小位分
の奇文は聖文ハ俗俄の
聖文ハ紫野よりあり
ありさ所のあり はぐさの文也
太素抄 信清公也号坊門又
号太素内府関白道隆公の
後也
牛の仁牛飼 天子の仁牛飼
とのもの也

は車は乗りまいきろう。弟みは
童は。かてる所まて仁牛をハをふ
物といひろうくれ。弟い殿
は氣をあくかりてをは車
やらん事。さいまれよ由さりて
えをし。弟みは男ありとて。
は車よ頭をうちあてられよ
くりてはるのさいまれを。

女房のみとも をを義素辭 を秦殿の男。科の仁牛飼
はをう。ぱうつまさ殿よ仕りきろ女房のみとも。
一人をひさちぱ一人ハをとうちぱ一人ハをいう。
一人ハをとうし。とつきろれ事り
宿河原 摂津國よあり 宿河原といふ所よてぱろく
かろく 暮露とかといへも
枕詞とかへき地京國よいて おかくあつまりてれ所れ会仏を
し侍をいとかりかろくの
きしとい地一巻ありきのを
ろよろくれるへり
ぱ。そ仁中まいろを坊とやかろやおりまいと。

弱くれば。をの中よりいろをゝしてあぶくれ給ふたを
とゝふれば。をゝ梵字ニヤ者也。をの君ゝ所あふ
りと中人東國まで。いろをゝとゝかろまろさ
きろうと弱ゝうゝ。をゝ人まあひまつて。弱ヤ
さくやとせひて弱ヤ也といふ。ろをゝゆくしく
も弱おゝうゝ。をゝ事作りきこまて對面し
たてまつゝ道場をきり作ろへし。あの川原へ
まいりあゝあるゝこゝをさゝうゝちいつゝこゝも

見つき給ふあまゝれゝろゝひよゝ。佛事代嬪よ
作ろへしといひ定て。二人川原へおあひて。行
ゝりまつゝぬきあひて。ともよそりかろくと
いふもの。昔ハおりきろまやをき世よかろへし
梵字漢字をといひろ者。をゝ姫ゝりきろと
ゝや。世を捨ろよ作て。我執ゝく。仏道をね
ふよ作て。開悟をゝくす。放逸無慙ゝ捨
ゝきとも。死をかろくしてかもまつまろかさ

のぶきよく形をして人のこうしゆくは
ゆきつきをゆうせ
寺院の号ぎゝぬこうつれ物まぶをつろ
事むつかし人はすこうまも求に。てありぬすに
やはく付きろせ。ぴぴきをふうく寒〳〵光えとあ〳〵
はさんとしゝこうやこれ空ゆうぶいとむつゝ。人のゐ
もめあれぬ文字をつくんとすろ。益あき事
あり。何事もめつしに事をりとあ。実伝をこ

のむ。ハ浅き。れ人のゐあ〳〵にあるこすゝやと我と
論語益者三友損者三友あり
友とすれはろき老七あり。
ゆきをりとをくりるく後んこと
あき人は交ハ必消事あり。
ゆき人ハ血氣さろん。あろ好
陸放翁ゥ少年某英の交を
同参の森雨よそうすきいう
ゆつよ紅人を暑をなれ
ゆ又飲食ともゆ恋よきろ故ゆ
化をそこうゆ事あり酒をこ
のむ人を事のゆこれをそ
れて也たけく勇る兵を一物
乃いうゆ力を言れて父母の
裏をのこす事あり屋言す
ゆ人ハ万事たつへりす欲ゆう
一ハ交ハ病ゆく分つよ交。
ゆきハ酒をこのむ人。ゆハ武くい
ゆハ酒をこのむ人。ゆハ武くい
きめろ兵六ハ屋言をろ人。七
ハ欲ゆき人。ゆ紅友こあ。
一ハ地ろく友。二ハくをし。

きくらげ　雞子　こんにゃく　さとも
ちろすみそよくれ

鯉の羹　ひいろ貝ハ鬢そく　尋
魚を膠　よねろを鰾　とゝ
須磨録ハ鯉魚膠を墨ゝ
磨て書りさせた書黒ハ
ゝて変ゝ　とあり

雜　儀礼相見之贄各執雉大
夫執鴈注雉取其守介不失
節鴈取其候時而行也儀礼
納采用鴈

松茸　本草綱目小菌蕈の類
おゝり　香蕈　あゝハ松茸の
熟ゝ　ゝけゝを　ひを
耳と云ハ　ゝ茸　ハ

三ゝハ智恵あゝ
鯉乃あつもの　ひいろ貝ハ鬢そく
きすとあん　ハすもつくゝ物
あれハねぎりゝ　ゝ　鯉え
くりゝ　前ゝてきゝ　ハ
やんとゝき　ゝ　ゝ　雜
きゝ　ハ　ハ　ハ
湯殿ハ　ゝ

出ゝ耳の字をあやまれ
りゝす　ゝ　ゝ　ゝ　中
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　棚
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

鱧と云字本草綱目韻書等に
分明あらず海篇心鏡に鱧
音堅大鯛也とあり万葉集
第九水江之浦島児之堅魚
釣鯛釣矜及七日と云へり又
式部太膳石上堅魚釣とと
いへる人の家も同才八よの
きり倭名集に鱧魚加豆毋
とあるは鱧とも堅魚とも
出也法華八昔うりとゝ云か
れるき異也

ふとゝ作るとり記。頭八下部もくりけずきりて

とヤきれうりきり
獨魚乃海にろかといふ魚
八ぼさうひまはちうあきりの
まて。ぼはちとてゝすはかりそ
ぎも獨魚れ年寄れやはちく八。
ぼ魚をのれゝ五ゝ五ゝ世ま
て八。なうくゝしきへのおへ出

作り物ありとヤ記。かやうれ物も世の末よあれハ
上さゝ物まてもへうりきふこうゝ作れ
唐の物八素代ハ　竜脳麝香の
類也ゆゝよゝさ物也
をゝさ物をたゝうとせを
尚書旅獒篇不宝遠物則遠人格　老子経曰不貴難得之貨使民不為盗
とかくゝます。書せハぼ國ハれ
ゆくれむろまりぬきハかきを
うゝてんをろをゝやれうれぬ遠よ世男れ
物ともれをゝとりつゝて。舞くゝをゝをゝくろぼとを
ろうぼ。をゝさ物を裏とせれとも文ほうゝをたゝう

をしうとしまうすとも

やしまひかよ　周礼六畜注

獸可畜者六畜牛馬羊犬豕雞養之曰畜用之曰牲又云在野曰獸在家曰畜　字書同　許救反　荘子秋水篇何謂天何謂人曰牛馬四足是謂天落馬首穿牛鼻是謂人　郭象注云人可不服牛乘馬乎服牛乘馬可不穿絡之乎牛馬不辞穿絡者天命之固當也苟乎當乎天命則雖害之人事而本在乎天也　希逸曰必求人事而本在乎天也　荘子天地篇自然義云牛馬四足得於天自然者不絡不穿將無所用此便

是人心一段事

犬ハ猫をとりかせく　金楼子

陶犬無守夜之警烏雞無司晨之益　東坡云養猫以捕鼠不可以無鼠而養不捕之猫蓄犬以防姦不可以無姦而蓄不吠之犬

家ことわ　孟子雞鳴狗吠相聞而達四境　老子云鄰国相望雞犬之音相聞

生ものハ獸ハ　荘子天地篇困可以為得乎則鳩鴞之在於籠亦可以為得矣在纆繳之中而自以為得則是罪人交臂歷指而虎豹在於囊檻亦可以為得矣　司馬遷報任少

もありまんそかの畜獸さへ

てゆきぬかりもしるきさ

ものハかりにこめ。くさりをち

れ。犬ハ猫をきり。籠に入ら

さて。雲をこひ。野山をおりぬ

慰やむ時あり。そ思ふ方よ

あうして。ふくはんあん

人をそうまんや。生をとる

郷書曰猛虎在深山百獸震
恐及其在檻穽之中搖尾而
求食　東坡詩三云烏因丕
亟飛馬繫嘗金馳
生と云〻めて　夏桀無道ふして百姓をやゝり妹喜と愛して瑤墓と作
牛飲するをえてよろこひ関竜逢を殺す又殷紂姐己と寵〻〻婦人のえと
よろこひ康墓鉅橋とつくりて天下の財をあつめ狗馬奇物を文室にみち
をき酒池肉林をついやして長夜の飲をなし炭を炮烙の刑を行ひて人民
をやきころし朝に涉の脛をきり賢人の心をさきころしめる女の腑をみる
を怪生をころしめて月をよろこへり也果して桀紂国家をうしなひ
力をやろかす

王子猷云る　章孝標が詩に阮
籍嘯墟人歩見子猷看屋鳥
捷烟に句朗詠にあり王徽之
字子猷羲之の子也風流の人
也晋に仕て為黄門侍郎常

竹と愛して種て云ける
云と云ふ清の心ハ竹間の烟
よりのとけ〻〻遊捷するとえ
て愛とろ義之

ものをきる　尚書旅獒篇
珍禽奇獸不育于国

人のを絶ハ文あきらかに
六経に書とゝのみあきらめ
て聖賢の道を知を第一とし
すき道ハ忠臣父子夫婦兄
弟朋友の五ツ子ハ人ハ
教ハ仁義孝弟忠信ゝ
すきん

醫術を習ふ　晋張華梁陶貞
白唐孫思邈ゝ類全く醫者

元めつしに食あやしに
獸國かやしかりをとろう
文をもをゝれ

人の道絶文あきらかにして
聖賢教を第一とし次
第に書をもをゝ
まハ医学ひとすゝまハ
あくともをとらへし学問
を仮あんためをゝ醫術を

みらあしすゆ学問のこゝろ
て醫をゆゝ考
忠孝のつとめも醫ゆあり
小字曰伊川先生曰病肌於
麻委之庸醫比之不慈不孝
事親者亦不可不知醫
弓射馬ゆ玄者 周礼注礼樂
射御書数謂之六藝

食人人の天也 帝範勸農篇夫
食為人天農為政本倉廩實

則知礼節衣食之則忘廉恥
史記酈食其傳云王者以民
人為天而民人以食為天
多能ハ君子の能ゆ也 論語
子罕篇大宰問於子貢曰夫
子聖者乎何其多能也子貢
曰固天縱之將聖又多能也
子聞之曰大宰知我乎吾少
也賤故多能鄙事君子多乎
哉不多也
巧ゆ巧ゆ深作ゆ妙ゆハ
文選十六思舊賦序嵇康傳
綜技藝於絲竹特妙
幽玄の道 八雲抄ゆ和ゆ
幽玄林ゆ

をろかなる事なり。金はすくれたれども。鐵の益なきがごとくなること

第一食物　驚座新書云居服食三等湯東谷語人曰学者居中等屋衣下等衣食上等食何者茅茨土階非今所宜瓦屋八九間僅蔵圖書足矣故曰中等屋衣不必綾羅錦繡也夏葛冬布僅適寒暑足矣故曰下等食至於飲食則當遠求名勝之物山珍海錯名茶法酒物と備庶不為九流俗士故曰上等食　多くの人に病あり　一切の

おりふしの人の分よやむことをえざるものあり故に孔子も行戦疾の三れをつしめり　食と衣と居はいとなくてかなうを　食と衣と居あと菜とを合てはとす　杜甫詩分類七多病所須唯藥物微躯此外更何求

人はよろこばれい疾病がくそかがふかさるものあり故に

食物第二ときは。第三は居所也。人間は大事は三ときは。飢をくるしきとして。困はすくるを

楽とす。但人皆病あり。病はすくれぬ也。ぞ愁思

くるし。醫療をまつへくして。薬をとりくて。その

と求えさるをまつしらとぞ。はりきさるをとめり

とんぱいのかとをとめいとあむをたこるとん。
ゐの事倹約ハ。誰の人うたがすとせん
是法法師　新千載集第十八　雑歌下是法法師
のゝまても同しゝき世と安拾を
いろゝゝの山より為をかくさまし
又新後拾遺集第八秋哥ホ
我もはゝゝ山おろし吹て衣うれ
ゝまゝゝ川よりの月うき
出仏　すゝ為ゝゝ出愚人
のゝとゝ人とゝとゝすてゝゝうき
をいかゝ

くて皆人涙をあゝしゝり。導師坊つて法華経
れ人とも。いつゝゝもとゝとゝ。ゝゝいたゝとくおゝて行ゝ
つゝと感しあへゝゝ。逸事よ。或老のいとくゝふふとも
ゝへあさ外と唐の狗よ似ゝあんゝへいとゝひゝゝ巳に。
気もさめて。おゝかりゝゝゝ。導師のかめやゝ
やゝゝへき。又人は酒すゝむゝとて。とれき先ゝへて人よ
ゝゝゝゝんとすゝハ。飯よて人ときゝんとすゝよゝゝゝ
せ。二方よゝつきゝゝゝ。和あれハ。ゝゝゝゝとき先我

頌をきゝおよぶ人をいえきゝぬ也。とのゝ先碑
てゝ[illegible]ふ人はもめきゝとゆ記。劔をてきりこて
ろゝゝゝゝゝゝゝゝやゝいとおゝゝゝ記

山低万事不可忘べき也陰極而陽生のゝ也天地萬物の道ゝ
むゝ

そゝちれ負きゝゝゝゝて。ゝゝてふく
ちゝいきんとせんなゝあひてゝゝゝ

へゝすゝゝ。ち海つゝきてかつゝくきゝ時のゝいゝれるとゝゝへし。
を時をゝゝゝゝゝゝ記ゝくちとゝふゝゝゝゝゝゝ去ゝ記

論語先進篇曾人為長府閔子騫曰仍舊貫如之何何必改作

改て益ゝ記ゝすゝゝゝゝゝゝゝゝゝため

ぬをゝゝとすゝ也

雅房大納言　正二位村上源氏號後土御門太政大臣定實公男

雅房大納云ゝ先ゝゝゝくゝゝ記
人ゝて。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ふようとすくまてあり。めてぽ来れれ氣を
もたくひ。暴進もさまハふりりさくうるとれ人
獣をそこれうりりハぽハたれとだのあ小ハ近なき
こと也。屋云ハ不仮なれともかくることとき久也活
てすくれ也ものひろろ。来れれハいとこうとき事
いろろものをころ〜仏法ありたんいきり拍をころし。
は殺生をいすめて贅を
ものころり
いこめたくりめてあそひたの
畜生残害　残害ハここのひや
ゆる也多獣虫魚のたくひは
くひあふを畜生残害と云
〜ゆへ人ハ畜生残害乃た

くひや。多の多獣ちいさ紀虫まてもんをとえん
てる指をんろよ。ゆをれとひ釈をあつ〜て。
夫婦を女ひねみいろ。欲おりく分を色
〜余残れめり事。ひとへは悪癖ゆへは。
人ゆりもはさりて甚しかれかくしをあ
〜人命をうえんす。いそうふまかさん
をへて一切の情をんく慈悲れふうんを。
人倫りあ〜

顧問　論語公冶長篇子曰盍各言爾志顔淵曰願無伐善無施勞朱子注云伐誇也善謂有能施亦張大意勞謂有切或曰勞苦事也勞事非己所欲故不欲施之於人

施ともへたらず　もへたらハせしりぞけ　寃字也爰実の罪を蒙りて云ひくくことゆるさるを寃と云又冤字とせさらとよめり

賤き民の志　論語云四夫匹婦可奪志

いとさるさまをとり

禪録ま嫌雖と云ふ

たとゑりき人のうろこひいろ

顔回ハ志。人ハ労をかとこさしと
ありぞへて人をうらしめ。施をも
へたらず。いやしれ民ハ志を
もうふへからぬ。いときかれる
ぬすり。おとり。ひとうしめて
奥ところ事ありぞ。おとり。れ人ハ
まとるゝねぞ。とまもあゝれ
ぞへ。おさまむ心ぞ。分ゝ。みて

禄法ハ隨流認得性無喜亦無憂ときハ仏祖の頌ま
台教ハも不起一念のあと
空劫以前とさ一威音那畔
といひ道家ハも混沌未分
といひて真ぞうろえまハ
喜怒哀楽の七情もことく
く虚妄ありとす

病をうくふ　陶隱居云人生
氣中如魚在水中水渇則魚瘦
氣昏則人病邪氣之傷人最
為深重精神者本宅身以為
用身既受邪精神亦乱

茅とのゝて汗をゝとしう
嵇康養生論丈服藥求汗或
有弗獲而悅情一集渙然流一

おそるべくきうしく涉ま
きとひ。波ハ切あゝへ。ぞもと
ゝるやまて奥ところ事。意想
のひよあゝ。とあ。れ人の。
よろこひいるとうかひうの
も。皆虚妄ぞれともぞれう
実ぞこの胴ハ云せうぞ分をやう
ゝとも。心をいくまゝ。しうぞへを

離絡朝夫餐則置然思食而
曾子銜哀七日不饑云〻

凌雲の額を書て　世説新語
補十六云凌雲臺樓觀精巧
先稱平衆木輕重然後造構
乃無錙銖相負揭臺雖高峻
常隨風搖動而終無傾倒之
理魏明帝登臺懼其勢危別
以大杖扶持之樓即纔壞論
者謂輕重力偏故也　洛陽
宮殿簿曰凌雲臺上壁方十
三丈高九尺樓方四丈高五
丈棟去地十三丈五尺七寸五分也　韋仲將能書魏明帝起殿欲安榜使仲將
登縹題之既下頭鬢皓然因敕兒孫勿復學書文章叙録曰韋誕字仲將京兆杜
陵人太僕端子有文学善屬辭以光祿大夫卒衛恒四体書勢曰誕善楷書魏官
觀多誕所題明帝立陵霄觀誤先釘榜乃驚盛誕韓蔚長組引上使就題之去地

そこの事ぞ苦。病とうろ
ともあるくハんよりうくぶろ

凌雲の額を書て　世説新語
補十六云凌雲臺樓觀精巧
先稱平衆木輕重然後造構
乃無錙銖相負揭臺雖高峻
常隨風搖動而終無傾倒之
理魏明帝登臺懼其勢危別
以大杖扶持之樓即纔壞論
者謂輕重力偏故也　洛陽
宮殿簿曰凌雲臺上壁方十
三丈高九尺樓方四丈高五
丈棟去地十三丈五尺七寸五分也　韋仲將能書魏明帝起殿欲安榜使仲將
登縹題之既下頭鬢皓然因敕兒孫勿復學書文章叙録曰韋誕字仲將京兆杜
陵人太僕端子有文学善屬辭以光祿大夫卒衛恒四体書勢曰誕善楷書魏官
觀多誕所題明帝立陵霄觀誤先釘榜乃驚盛誕韓蔚長組引上使就題之去地

きくハ。病とうろ
ともあるくハんよりうくぶろ
ハすくあり。菜をけ
て汗を求るハ。ぶろしあるを
あきとる。一見ハおそるるハ必
あせをかうすぶのたとこあり

二十五丈誕甚危懼乃戒子孫絶此楷法著之家令　又
魏書二十一有韋誕傳

といふことを知へし。淺雲ぶん
額を出て。自頭の人とあり。
ためかきよれを

我身を後にして　論語仁者
已欲立而立人已欲達而達人　老子云欲先民必以身後之　又云不敢為天下先
故能成器長

物ふあうぶ。そのきを後
きて人よりさうひろ分ぶ
ほふしぶ人をそんよするハ
ちうぶ。よろつの道ふも。勝負
をこのみて人を。勝て奥あん

ためあり。をのきう羅(けい)れまうとうこと(ばよろ
ふ)。まをてうう(あく)おかゆへきうみたれ
うう。ヨう(ゆ)けて(く)人を(ば)ハしめんと(ふ)う。ヨかか
あそひの(ま)あうう(へ)。人よかいなく(ん)ゝをせて。
むうまうき中ヨたうう(ふ)ゝも　張子厚東銘戲言出(ヨリ)於思也
戲動作(ヒトヲ)於謀(ヨリ)也
ぬふ(ま)ゝを。人をとうう(ま)りあうむきて。とのれう(ま)れ
まうりうう(ま)ゝ中(ば)ゝ(ま)ゝ(ま)ゝ(ま

負ーきそのハ　曲礼云負者ハ
不以貨財為礼老者不以筋ー
力為礼

りく礼とは。そのうるをもりて。及えさう時。
速かやむを貴といのへ。ゆうさちうんハ人の
あやまりあるを。ふをもつて。ぞ出てえきむハ。
をのをうあやまり也。まつしくうをもつされ
ハ盗ちうおとろへくうをもつされハ病をうく

白川院應徳三年立
鳥羽殿
鳥羽殿

まつしき者ハ財をとりて
礼とす。むさう者ハ力をも
礼とす。及えさう時。

元良親王　陽成院の御子
元日蓑賀の事　朝賀の時な
あるまし也
大極殿　拾芥云大極殿朝堂
院平殿名八者院又云八省
院天子臨朝即位諸司告朝
所又謂之中臺
李部王　延喜御子式部卿
昭親王也其ハ記録を李部王記と号す式部を吏部と云ハ法
式をとる者を吏と云也行理行吏行李の字皆通用をとる音同ーきなり
左傳正義ハ見えたり

てらさく侍れ号ハあ
むりあり。元良親王
えの蓑賀ハ甚勝
して。大極殿より鳥羽の作り
道まて変えきるよう。李部王
の記ハ作るとや
東枕也　礼記云寢時東首
孔子も東首をさんり
鳥のおとく東枕也。おろく東

論語鄉黨篇云疾君視之東首如朝服拖紳朱子注云東首以受生氣也新安陳氏曰天地生氣始於東方或問疾君視之方東首常時首猶在那邊札記自云寢常當東首矣平時亦欲受生氣恐不獨於疾時為然朱子曰常時多東首亦有隨意即時節如記云請席何向請衽何趾這見得有隨意向時節然多是東首故玉藻云居常以寢常東首也常寢於北牖下君問疾則移於南牖下

非文の遺祿パラ

高倉院パ法花堂ハ三昧僧ナリ

高倉院乃法花堂ハ三昧僧ナリ

三昧　此云調直定又云正定亦云正受主峯疏云不受諸受名為正受遠法師云支離三昧者何專思寂想之謂也思專則志一不分想寂則氣虛神朗氣虛則智怙其照神朗則無幽不徹斯二乃是自然之玄符用一而致用也云云天台止觀畧明四種一常坐二常行三半行半坐四非行非坐云云四種三昧皆依實相實相是安樂之法四緣是安樂之行取以始末皆依法花即法華三昧之妙行也翻譯名義集詳也

ーの僧師とやいふ。或時。
後をうしろ顏をつくとえて。
我形のえまて涉まきこと
を。後をかうくなりて鏡さへ
うとまれぬらーきれぬ。
あらく後を思てまたえふ
そうを文よへまいろこと

徒をとりて　三国志魏夏侯惇
従征呂布為流矢所中傷左
目時夏侯淵与惇為将軍軍
中号惇為盲夏侯惇怒之每
覧熊畫怒輒撲熊著地
白樂天感鏡詩今朝一拂拭
自照顦顇容照罷重惆悵背
有鸞盤龍　許渾詩高歌一
曲掩明鏡昨日少年今白頭

人のうへとはいはりて

論語学而篇不患人之不己
知患不知人也注尹氏曰君
子求在我者故不患人之不
己知不知人則是非邪正或
不能辨故以為患也

ものかの。沙雲のてめいりよあり。て。義者うとゆ作こう。病
うこ美ーうかーうけうる人も。人のよとれをりて。どのきとへ
きうこうゆ。ふをきうすて。おとうといへとりうこへうす。
れとのきをうをゆうをるる人といへへ。かうこうへよくれ

ものかの。ふの愚ありうとものうこ。藝れてうこうのきとも
うこ。分乃教ありねをうも知と。幸のゆありうとも知
す。病れをうこうをも知と。死のうこさ事をもうこ。
おこうふ道のいうこうとも。分れこの非をうこ
ねい。ゆうてかれうこーアうこ。但形ハ続ようんゆ。幸ハ
うこへてうこ。分のうとうこねうのいうこねとうこへき
分のかきれい。うこねよ似うこうこいこす。形を
あうこうあ数をわうこ。せのうこうのあーす。拙をうこ。

ぢぬ　もろこしあんう閑ト
人生待足何特足未老得閑
方是閑
故とぞ　尚書大禹謨念茲
在茲

ゆ。行道ありとをしへ。あんう
をかりみて是よあしう。ちうをへて人よ是楽せう
ぢてとして。ぶよまうハ脳也。形又まてゐをく猶
よりて。おつて人。学ぶ。大きよまうり。不憐也
藝をとりて。憍慢の種よつまり。雪ぬりらと
雪のうら　古今ト
まろ月れ夫よあう孤ぶと　いてきて。うりまう人よあう

かりらの雪とあううひしれ
高蟾詩人生莫遣頭如雪縱
得春風亦不消

ひいんやぬとちうことを望ま。
ふぬるをうまへ。事うまれ
ことをまうへよ。おうきと人よ蝟ふハ人のあうまう脳ふ
あうんむ。ふ子ふよ。むられてみつうう分をうとも
ぢうせ。ぢうとのやうちうハ。命をおうう大ふ。
今てふきうれりとぢあ。かふちうされハふあ

資季大納言　法興院摂政兼
家公末孫景綱梅
是氏宰相中将　村上源氏通
方卿孫通俊卿子

資季大納言へをとうや。ゆえき
子人。具氏宰相中将ふ逢て。

ゐ丶 汝之吾の字をゐと
よむも人をそなて吾子と
云もは義也俗まおぬしと
いふことゝ

ゐゝれとゝまんかものことゝは
事ありせ言やさらんやといい
きられ。具氏いゝ伝ん。とやきれきうをゝ。ゝ。ゝあゝ
ひのへといられてゝ。ゝうくゝき事ゝゝこゝもまひ
きり伝ゝれハ弱やまてもあゝ。ゝはとあゝさゝゝろこ
との中よ。おかつゝゝあゝれゝるをゝう。内事ゝゝ紋とや
れゝう。まゝてゝくゝとのあゝれゝるハなゝこゝや
ゝりとも。あゝきゝめゝやゝさんといゝれゝれゝ。を習ゝれゝへと

女房ゝゝも。具ゝあゝるゝはゝゝゝひゝゝゝり。おゝゝゝ伝ゝ前ゝ
てゝあゝゝゝゝゝへゝ。まゝけゝゝん人
前ゝ、院の伝ゝおゝ也
供伝をまゝきゝゝゝへゝ
ゝゝまひゝのゝゝゝゝゝゝ

ハ。伝をまゝきゝゝへゝとゝゝゝ
めて。伝ゝゝてゝゝゝゝゝゝ

[illegible]んとやされろ。大納言へひたすらとつまり
て。ひたすらろとなれ。いつまもさいたといろれ
ふを。をとりふるひ[illegible]ひたりけ[illegible]そろことを
[illegible]ん。とさこめやつとやされ[illegible]。大納言
[illegible]保　保ハ[illegible]すとよ[illegible]へ道まけふありて。[illegible]保い
其所作をもかやもろを云
てゆてハかきよまけて
ふまひをせ[illegible]ろ也

う先[illegible]せ[illegible]ろ[illegible]
ふとも

故法皇　花園院号萩原法皇

[illegible]ろとし[illegible]あつもを。故法皇とのゆ

[illegible]ふれまいりろふいろ海いり侍ふ
侍所の名を。文字も切能を易下されて。そ[illegible]に
ゆ[illegible]ハ。中[illegible]ふ[illegible]ゆ[illegible]れ侍きう。[illegible]と

本草　非農をゆめて侍ふ
梁陶隠居を注し唐宋乃
[illegible]侍ふ。[illegible]草あり

六条の内府有房　従一位
内大臣知漢の[illegible]也村
上源氏通光公孫也

[illegible]と云文字　韻會鹽金扉
切説文鹹也从鹵監声古者
風沙初作煑海鹽徐曰黄帝
臣也集韻或作盧塩俗作塩

[illegible]ゆ[illegible]ん。[illegible]ゆ[illegible]ん[illegible]ゆ[illegible]ん[illegible]ゆ[illegible]ん

非是監居銜切 父臥峪苟聲
臥五貨切 伏也 父人臣取美
伏也 人臣事君俯僂也

いつゑの偏　文字のゑんつくると
云ときは偏旁と云也

とよみようりてとふ　そのと
ゝろゝくれてと云てゝろゝ潛を
とよむとよめり

獻蔵ようゝひゑとれはあゝ引の
山下とよゝ泉也あくら年
杣人ハ文本むゝしあゝ引乃
山れ山むてあゝとよむあり

りろゝぬ土篇よりとやれ
ゑきれんゑのかとをてまあゝ
れよゝうゝのよハちんゝりまて
作へゆゝきとゝろあゝ。
とやゝきれきゝうよゝてみふふ
ゑてまゝうゝいてよゝ言ゑ